TOYBOOK COLLECTION SERIES
GUNDAM
OPERATION
A·BAOA·QU
トイブックコレクションシリーズ　ガンダムオペレーション　ア・バオア・クー
ア・バオア・クー レポート
VOLUME
0003
ジオン公国軍兵器編
TOYBOOK

国民性を具現化したジオン公国軍兵器
The arms which embodied national traits

ジオン公国軍が一年戦争に送り出した兵器群は、その国民性を十分に表したものだったと言える。

まずはその技術力。モビルスーツ（以下MS）、モビルアーマー、ニュータイプ用兵器など、次々と新技術を開発しているが、これは圧倒的な国力をもつ連邦軍に対して、最先端の技術をもって対抗していこうとするジオン公国軍の気概の表れであった。

また、曲線的で、生物的、ある種グロテスクといってもいい兵器のデザインは、ジオン公国に根付いた文化によるものだ。歴史上わずか10年足らずの国家だったが、ジオン公国には極めて独特な文化運動が展開されていた（資料によっては「ジオニズム文化運動」と呼ばれることがある）。この文化の影響下では、極めて生物的な形状を重んじ、直線を廃し、曲線を主体とした造形を志向する特徴がみられたのである。

このように、ジオン軍の兵器は国民の気概と文化の融合であり、それゆえに後世においても人をひきつける魅力を持っている。

史上初のMS・ザクⅠからニュータイプ用MSジオングまで新旧さまざまな兵器が投入されたア・バオア・クー戦。この一戦を振り返ることでジオンの技術と文化の歴史、そしてその国民性を同時に見ることができよう。

ガンダムを堕とした、ニュータイプ用MS

ジオン公国軍の最終MSにして、最初期型のサイコミュ搭載式MSがジオングである。ジオングは「ジオン」の名を冠されていることからも分かるように、それまでのジオン製マシンで培われた様々な先端技術が投入されたMSで、ジオン公国の威信をかけた機体であったともいえるだろう。それは、他の一年戦争型MSを超越したジオングの諸元――有線式サイコミュ兵器を始めとする多数のメガ粒子砲、9000kwオーバー級のジェネレーター、総推力20万kgに迫るスラスター・システムなど――からも推察できよう。

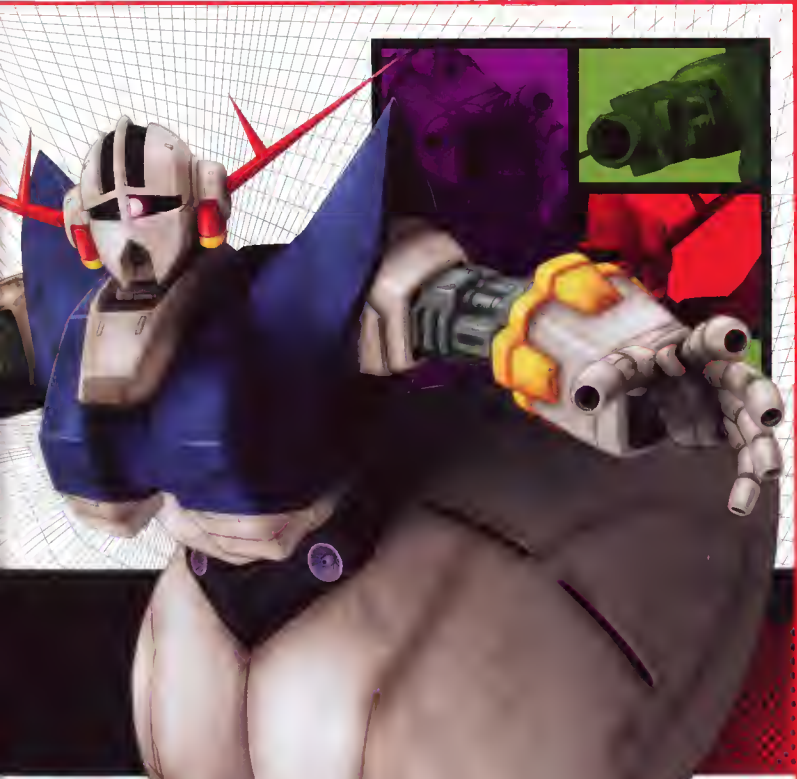
カタログ・スペックの上では、第一次ネオ・ジオン戦争期の第4世代MSに匹敵し得る超マシンとして完成したジオング。そのジオングの武装面での最大の特徴が、腕部に採用され有線制御式メガ粒子砲である。これは5門のメガ粒子砲を装備した前腕部を、サイコミュ制御型の機動砲台としても使用可能としたものだった。同系列の有線式サイコミュ兵器を搭載したMAN-03ブラウ・ブロがそうであったように、ジオングでもサイコミュを介さない制御が可能な兵器だと思われるが、基本的にはニュータイプ（以下NT）能力を持つパイロットにより、ジオング本体と同時にフル・コントロールされる。比較的古くからNTの戦争利用を研究してきた、公国軍ならではの装備といえる。

連邦軍のあらゆるMSを凌駕する性能と装備を与えられたジオングだが、サイコミュ兵器そのものとなっている腕部、脚部を欠してスラスターとしたスタイルなどから、汎用性を重視したMSというよりも、局地戦用のMAに近い兵器となっていることがわかる（脚部が完成しないまま投入されたのは事実であるが、脚部が装備された場合、全高35mを超える大型MSとなってしまうため、やはり通常のMSのような運用は無理であったろう）。ジオングをMSではなくMAとして考えた場合、その群を抜いたスペックも理解できる。

アー・バオア・クー戦に投入されたジオングは、NT能力を開花させたシャア・アズナブル大佐に委ねられ、一説には4隻の連邦軍艦と18機のMSを撃破。その後、終生のライバル、アムロ・レイ少尉のRX-78ガンダムと交戦し、相討ちとなっている。

たった一日のみの活躍で終わったジオングだったが、その設計コンセプトはMRX-009サイコ・ガンダムなどの大型NT用マシンに受け継がれていく。

SPEC●型式番号：MSN-02　開発工廠：ア・バオア・クー　全高：17.3m　本体重量：151.2t　ジェネレーター出力：9400kW　スラスター推力：18万7000kg　武装：頭部メガ粒子砲、本体メガ粒子砲×2、腕部有線誘導5連装メガ粒子砲



MSN-02

ZEONG

MSN-02 ジオング

不遇に終わった、公国最後の量産機

一年戦争末期、ジオン公国軍最後の量産機として採用されたMSが、MS-14ゲルググである。

戦争の長期化に伴い、連邦軍の大規模反攻やMSの大量投入を懸念したジオン軍は、主力MSであったMS-06Fザク Ⅱの後継となる機体の開発を指示した。結果、次期主力MS候補としてトライアルにかけられたのが、YMS-15ギャンとYMS-14ゲルググであった。

ギャンがビーム・サーベルによる格闘戦を重視した機体であったのに対し、ゲルググはビーム・ライフルとビーム・ナギナタの装備を前提とした万能機で、RX-78ガンダムを強く意識した設計であった。MSは至近～近距離戦用の兵器であるとはいえ、ギャンは格闘戦に偏り過ぎな面があったため、トライアルは充実した射撃/格闘性能を持つゲルググに軍配が上がることになったようである。(トライアル自体が出来レースであり、最初からゲルググが採用されることは決定していたとの説もある)。ビーム兵器の装備だけでなく、他の面でもガンダムに匹敵、または凌駕する性能を持つに至ったゲルググだったが、他計画との擦り合わせに時間がかかったことや、ビーム・ライフルの開発の遅延などが重なり、大規模な実戦配備は終戦間際にずれ込んでしまう(ごく少数の先行生産機は、10月下旬からテストされていたとする説もある。また、ソロモン戦直後、サイド5宙域のテキサス・コロニーにおいて、シャア・アズナブル大佐はYMS-14の慣熟テストも兼ねて、ガンダムとの戦闘を行なっている)。ア・バオア・クー戦の時点では、戦力として期待できる数のゲルググが配備されたようであるが、そのパイロットは臨時徴用された学徒兵がほとんどであり、その性能を十全に発揮することはできなかった。

ジオン公国軍の次世代主力MSとして、劣勢挽回の起爆剤となることを期待されたゲルググ。しかし、アナベル・ガトー大尉(当時)機など、一部のエース・パイロットの機体以外はさしたる戦果も残せず、「理論上最強の量産機」のまま終戦を迎えてしまった。その着の着席が戦後のゲリラ活動におけるものであったことは、皮肉としかいい様がないだろう。

SPEC●型式番号:MS-14　開発工廠:グラナダ　全高:19.2m　本体重量:42.1t　ジェネレーター出力:1440kW　スラスター推力:6万1500kg　装甲材質:超硬スチール合金 武装:ビーム・ナギナタ、専用ビーム・ライフル、専用シールド

MS-14

GELGOOG

MS-14 ゲルググ

MS-09R

RICK DOM

MS-09R リック・ドム

大戦後期の宇宙戦を担った、空間戦仕様のMS

MS-14ゲルググの量産本格化までの繋ぎとして、暫定的な主力MSとして量産されたのがMS-09Rリック・ドムであった。

MS-06Fザク Ⅱの後継として量産されるはずだったゲルググであるが、計画の遅延が続き、量産の見通しが立たない時期があった。そこで陸戦用MS、MS-09ドムをベースにザク Ⅱとゲルググの繋ぎとなる宇宙用の主力MSが開発されることになった。ドムは重装甲とホバー走行による高機動性を両立した画期的なMSで、主武装の大型ロケット・ランチャー、ジャイアント・バズによる大火力も高い評価を受けていた。陸戦用に開発されたMSを宇宙用に再設計するのは、MS史全体を見てもほとんど例がないが、改修は比較的容易に行なわれたようである(ドム・タイプMSの脚部を持つ空間試験用のザク Ⅱ＝MS-06RD-4からのフィードバックがあったともいわれている)。

主な改修箇所は、地上用の熱核ジェット・エンジンから宇宙用の熱核ロケット・エンジンへの換装、スカート・アーマー内のスラスター増設、宇宙用冷却装置の追加などである。また、防塵装置や吸気口など宇宙戦に不要な装備の除去により、原型機に比べて20t近い重量軽減を実現。これにより原型機の長所を受け継ぎながらも、より多くの推進剤を積載することが可能となったのである。

宇宙用MSとして生まれ変わったドムは、型式番号をMS-09R、名称もリック・ドムと改められ、順次前線に配備された。ジャブロー戦後、宇宙の最前線に送り出された部隊(キャメル・パトロール艦隊やコンスコン艦隊など)の多くがリック・ドムを配備していたことから、リック・ドムの量産と機種転換は比較的順調に進んでいたと判断できよう。

RGM-79ジムと互角以上に戦える性能を持ったリック・ドムであるが、この機体が活躍できる場所＝宇宙が戦場になることは、宇宙に本拠地を持つジオンが劣勢に立たされたことの証左でもあった。リック・ドムは当初課せられた、ゲルググ量産までの暫定主力MSという使命は果たしたが、リック・ドムが実戦に投入される頃には戦争の帰趨は決していた。図らずもリック・ドムは、公国の敗北を暗示する兵器となってしまったのである。

SPEC●型式番号:MS-09R　開発工廠:グラナダ　全高:18.8m　本体重量:43.8t　ジェネレーター出力:1199kW　スラスター推力:57300kg　装甲材質:超硬スチール合金　武装:ヒート・サーベル、拡散ビーム砲、ジャイアント・バズ

一年戦争を戦い抜いた、公国軍のワークホース

一年戦争を通して、事実上のジオン公国軍の主力MSとして活躍したMS-06ザクⅡ。そのザクⅡシリーズの標準モデルとして知られるのがMS-06Fである。

公国軍のMS-05ザクⅠは、初の実戦仕様MSとして採用された機体ではあったが、機動性や出力、稼動限界時間などの面では必ずしも軍上層部を満足させる機体ではなかった。そこでザクⅠで得られたデータを基に、新たな実戦型MSとして開発された兵器が、MS-06ザクⅡである。ザクⅡはザクⅠの直系機で、基本的なボディ・ラインも似通っているが、その性能――機動性やパワーなど――には隔世の差があった。その性能差をもたらした最大のポイントが外部に露出した動力パイプで、これによってエネルギー伝達系などの諸性能が飛躍的に向上し、「Ⅱ」という名称を持つに相応しい新型MSとして完成したのだった。

ザクⅡは最初期型のMS-06A（A型）を皮切りに、核兵器の運用も可能なC型が完成。そしてC型から核兵器運用に関する諸機能を取り除き、当時の汎用MSの完成形として誕生したのがF型にあたるMS-06Fである。これらのザクⅡシリーズやザクⅠを大量配備したジオン公国軍は一年戦争の緒戦において、ミノフスキー粒子散布下の戦闘に対応できなかった連邦宇宙軍を相手に圧倒的勝利を収める。運用上の都合やNBC兵器の使用を禁じた南極条約の締結などにより、ザクⅠやザクⅡのA型、C型は前線から姿を消していったが、F型や陸戦仕様のJ型などはその後の戦いでも、その戦闘能力を見せ付けた。

一年戦争の前半戦で絶大な威力を発揮したザクⅡであったが、戦争が後期に入ると連邦軍がMSを投入したこともあって、流石に性能不足を露呈し始める。本来ならばザクⅡは第二線に退くはずであったが、緒戦の大活躍のインパクトを引きずる首脳部によって改良モデルの逐次投入が行われ、公国軍はア・バオア・クー戦に至るまで多数のザクⅡを投入し続けることになってしまう。それでも、MSに関しては一日の長があるジオン兵の乗機となったザクⅡは、絶望的な戦いの中、数多くの連邦軍機を撃墜し、一年戦争を通して培われた力を示した。

敗戦によりジオン公国は崩壊への道を歩んだが、ザクⅡは長期に渡る活躍により「MSの代名詞」という評価を不動のものとしたのだった。

SPEC●型式番号：MS-06F　開発工廠：ズム・シティ　全高：17.5m　本体重量：56.2t　ジェネレーター出力：976kW　スラスター推力：4万3300kg　強甲材質：超硬スチール合金　武装：シールド、ヒートホーク、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ

MS-06F

ZAKU II

MS-06F ザクⅡ

MS-05 ZAKU I

MS-05 ザクI

宇宙世紀の兵器体系を激変させた老兵

史上初の実戦型量産MSとして誕生したのが、MS-05ザクⅠである。

ジオン共和国はU.C.0058年の建国以来、地球連邦政府からの経済的な圧力や軍事力による威圧を受け続けていた。連邦のジオン（U.C.0069年、公国制に移行）敵視政策が続く中、ジオンの首脳部は密かに地球連邦との開戦プランを模索していたが、圧倒的な国力差は覆し難く、開戦に踏み切ることは容易ではなかった。

そんなジオン公国を開戦へと導く契機となったのが、U.C.0070年に公国軍が実施したミノフスキー効果の実証実験であった。ミノフスキー粒子の影響下では電子機器はほぼ無効化され、誘導式のミサイルやレーダーなど既存のシステムは使用不能となる。当時の連邦軍の装備は、このような兵器体系で占められていたためミノフスキー粒子下で有効な兵器さえ開発できれば、国力に劣る公国であっても連邦を下すことは可能であると判断されたのだった。そしてU.C.0073年、ジオン公国においてミノフスキー粒子の影響下で絶大な威力を発揮する兵器が開発される。それこそがMSであった。最初期のMSは試験機に過ぎなかったため、実戦に投入できるものではなかったが、U.C.0074年、遂に初の実戦仕様のMS、MS-05ザクⅠがロールアウト、順次量産されていった。

ザクⅠは機動性や継続稼動時間に難はあったものの、MS戦術の確立や関連技術の始祖的存在として、後のMS全体に多大な影響を与えた。一年戦争開戦時にはすでにロートル化していたためコロニー内の制圧や後方作業などに従事し、第一線からは外されることが多かった。このように、一年戦争開戦以前にその役目を終えていたといえるザクⅠであったが、終戦間際のア・バオア・クー戦では絶対的な兵力不足から前線に配備され、グゲルグやリック・ドムなどの新鋭機と肩を並べて戦うこととなってしまう。機動力を問われにくい防衛戦ならば、何らかの活躍が見込めるとの判断があったのかもしれないが、実態は員数合わせ以外の何物でもなく、大きな戦果を上げたという報告はなされていない。

SPEC●型式番号：MS-05　開発工廠：ズム・シティ　全高：17.5m　本体重量：65.5t　ジェネレーター出力：899kW　スラスター推力：4万700kg　装甲材質：硬スチール合金　武装：ザク・マシンガン、ヒートホーク、ザク・バズーカ

型式番号

モビルスーツの機種ごとに付される軍の承認モデルナンバー。ジオン公国軍では以下のように型式番号を付けていた。宇宙戦、陸戦用のMSには「MS」、水陸両用には「MSM」、ニュータイプ用の機体には「MSN」を与え、その後、開発順のナンバーが続く。また、同じザクⅡでも宇宙戦用はMS-06F、地上戦用はMS-06Jというように、仕様に応じて末尾に記号や数字を付け区別している。ちなみにモビルアーマーは「MA」で表し、MSと同様の法則で型式番号が付いている。

モノアイ

公国軍のMS、MAの多くに採用された主光学端末。MSの頭部に配され、目をイメージさせるため、"モノアイ(単眼)"と呼ばれる。MS-06ザクⅡのモノアイを例に取ると、光学装置(外部映像認識装置)と赤外線系センサー、レーザーセンサーが搭載されており、ミノフスキー粒子下での精密射撃を可能としていた。光学装置としては非常に精度の高いものであったが、機体の周囲すべての方向をフォローすることはできなかったため、機体の各所に補助カメラを配し、モノアイはメインカメラとして使われていた。赤外線センサーが搭載されているため、モノアイは一般的に赤い色で発光する。これは、相手を威嚇するという役割も持っていた。一年戦争開戦当初、連邦軍の兵士達は初めて目にするMSを「一つ目の巨人」と怖れたと言われ、実際にその効果があったようである。

流体内パルス・システム

公国軍のMSの関節駆動に採用されている方式で、動力パイプ(動力伝達パイプ)内の数千本の流体パイプをパルス状の圧力が超音速で走り、関節のロータリー・シリンダーを駆動するというものである。油圧シリンダーによる駆動に比して、作動スピードが速く、しかも運動に微妙な力の差を付けることができた。MS-06ザクⅡの動力パイプは装甲外部に露出しており、ある種構体の特徴の一つとなっている。しかし、格闘戦になった場合、容易に破壊されることも多かったため、一年戦争後期のMSでは装甲内に内蔵されるようになった。

ジオニック社

ジオン公国軍の多くのMSを開発、生産を担当した兵器メーカー。一年戦争前、公国軍の新兵器開発コンペティションにおいて、ジオニック社が提案したZI-XA3という人型兵器が採用され、のちのモビルスーツのモデルとなった。その後MS-05ザクⅠ、MS-06ザクⅡ、MS-07グフ、MS-14ゲルググなどジオン公国軍の基本的なMSの開発、生産を担当している。その他、一年戦争当時のMS開発メーカーとしては、ドム、ギャンを開発したツィマッド社、ズゴックや多くのモビルアーマーを開発したMIP社が有名である。

Terms of Principality of Zeon force

TOYBOOK COLLECTION SERIES

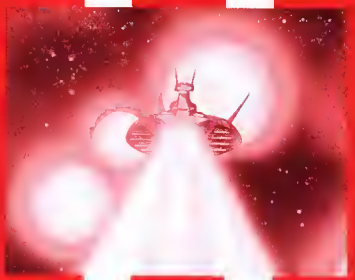
GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0003

ジオン公国軍兵器編



ジオン共和国の成立と軍備事情

一年戦争におけるジオン公国軍の前身は、その発生の経緯を辿るとジオン共和国の成立時までさかのぼることができる。ジオン共和国はU.C.0058年、サイド3の独立宣言によって樹立した。その際に結成された国防隊が、U.C.0059年の地球連邦政府による経済制裁などの示威行動に対する対抗手段として、U.C.0062年に国軍に昇格されることとなる。ちなみに、国防隊の設立に尽力した人物が、のちのジオン公国公王、デギン・ソド・ザビであった。共和国は国防軍を編成することによって、連邦政府に対する武力闘争をも辞さない姿勢を明らかにしていた。しかしながら、実際に当時の国軍に連邦軍との直接的な対決が可能であったかといえば、それは明らかに否であり、あくまで抑止的軍事力でしかなかった。当然ながら、1サイトの守備兵力程度しかない国軍と、地球圏全体を統制する地球連邦軍との力の差は歴然であった。事実、ジオン・ズム・ダイクン共和国首相が外交政策による独立承認と自治権獲得を模索していたことは周知の事実である。その状況が激変するのは、U.C.0069年のジオン・ズム・ダイクンの急死からであった。

公国軍の急速な軍備拡張

共和国次期首相に就任したデギン・ソド・ザビは、それまでの政策を180度転換した。U.C.0069年8月15日、「公国宣言」によって共和国を公国制に移行し、連邦軍との徹底抗戦を唱えてジオン公国の樹立を宣言する。ここから、公国の急速な軍事国家化が進んでいくのである。それをなしえた背景には、デギン公王をはじめとしたザビ家の徹底した独裁体制と、それに則った行政・軍組織の枠組みがあったといえる。ただし、当時の公国軍は連邦軍と同じく艦艇や宇宙戦闘機など、旧来からの延長線上の兵器で構成されていた。兵装に関しても、メガ粒子砲の完成にこぎつけてはいたものの、いまだ信頼性に欠ける部分も多く、完全な実用化にまではいたっていなかったといえる。しかしながら、その強力な指導体制のもと、挙国一致で兵員の育成、組織の拡充に力を注いでいくのである。

ミノフスキー粒子による新戦術の確立

ジオン共和国が公国制に移行した時点で、国軍（公国軍）は連邦政府との戦争を意図した軍事組織へと変貌を遂げていく。その軍事的背景には、実に30対1ともいわれていた連邦政府との国力差を覆す"切り札"があった。それが「ミノフスキー物理学」である（専門的な解説はここでは割愛する）。ミノフスキー粒子による電波妨害と、ミノフスキー粒子の性質を応用して完成されたミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉は、公国軍にこれまでの戦争を一変させる戦術を模索させるには十分なファクターであった。U.C.0071年、公国軍はミノフスキー粒子散布下における戦術（＝有視界領域における接近戦）に対応した新兵器の開発に着手する。その2年後に完成した試作機は、巨大な人型兵器であった。これが現在モビルスーツ（Mobile S.U.I.T.、以下MS）と呼ばれる兵器の雛型である。さらに開発を重ねてU.C.0075年2月、初の実戦用MSであるMS-05の試作機が完成する。これを以って公国軍は、MSを主軸とした戦術への転換をさらに推進していくこととなる。

一年戦争開戦への布石

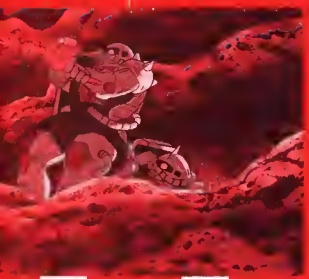
U.C.0075年7月にMS-05の量産体制を固め、同じ月にはこれを運用するムサイ級軽巡洋艦の1番艦が就役すると、公国軍は新戦術に則った兵器群の整備を着々と進めた。その一方で、同年11月にMSの運用試験とそれを扱う人員の養成を目的とした「教導機動大隊」を設立する。この教導機動大隊は史上初のMS部隊であり、この部隊においてMSによる基本的な戦法が確立されたといっても過言ではない。この教導機動大隊は一年戦争開戦までの間、小規模な紛争や破壊活動などに投入されたといわれている。同時に公国軍は汎用性に優れた後継MSの開発を進め、U.C.0077年8月にMS-06を完成させた。一年戦争におけるMSの代名詞となった"ザクⅡ"の誕生である。翌年10月、国家総動員令の発令によって、公国は実質的に戦時体制へ移行、その3ヶ月後の宣戦布告へと事態は進行していくのである。

公国軍MSの誕生

ジオン公国軍のMS開発史はすなわち、一年戦争におけるMSの歴史といっても過言ではない。連邦軍のRXシリーズなども、元をたどれば公国製MSを解析した結果生み出されたものである(連邦製MS独自の技術もあるが)。MSは革命的な兵器であり、これをもってすれば連邦軍との戦力差を覆して勝利を収めることができると考えた公国軍首脳部の思惑も、あながち夢想ではなかったといえるだろう。その裏地に「ミノフスキー物理学」があったのは、前述の通りである。しかし、ミノフスキー粒子散布下における有視界戦闘を可能とする兵器の原型を作り出すために2年の基礎研究を要した。そうして提示された試作機がZEONIC社のZI-XA3と、MIP社のMIP-X1であった。ZI-XA3を見たギレン・ザビ総帥が冷笑を浮かべたというエピソードが語る通り、その人型の機械はあまりに現実離れした代物であったのだろう。しかし、競合テストの軍配はZI-XA3に上がる。手足を利用したAMBACシステム(自動姿勢制御システム)による高い機動性と、歩行ユニットによる走破性、マジックハンドの柔軟な動作は、まさに「汎用宇宙機器」と呼ぶにふさわしいものであったという。この機体は新たにMS-01の型式番号を与えられ、実戦に耐えうる兵器開発の雛型となっていく。ちなみに、競合テストに敗れたMIP-X1だったが、宇宙空間の機動性に着目され、MAとしての進化を遂げていくこととなる。

稀代の傑作機、MS-06の完成

ZI-XA3 MS-01 の完成を以 てMSの本格的な開発に移行した公国軍だったが その過程は平坦なものではなかった 史上初の実戦用MSといわれるMS-05が完成するまでに MS-01を含めて4種類の試作機が提示された 装甲と機動性の強化 汎用性の向上 動力システムの整備など さまざまなトライアルを着実に重ねていくことによって ようやく兵器としてのMSの開発に成功したのである しかし、紆余曲折を経て完成 たMS-05ですら 公国軍首脳部の要求を完全に満たすものではなかった 作戦運用を想定した場合 その推進剤をはじめとする運用時間の短さがネックとなった その問題点を改善するため、MS-05の設計を根本から見直して性能向上を図り さらに生産性と整備性を高めることが次の課題とされた そうして開発されたMSが 一年戦争を代表する傑作機 MS-06である 多くのバリエーションを生み出し 以降の公国製MSの母体(もとになった)のMSの完成によって 公国軍のMS開発はさらに細分化され 加速していく



公国軍のMS開発、その変遷

公国軍は当初　MSの優位性に依る短期決戦を意図していた　しかし結果としてその目論見は外れ、のちに一年戦争と呼ばれるような長期戦に突入する　地球侵攻作戦の実施にともない、局地戦用MSの実戦配備は急務となっていた　そうした流れの中で水陸両用MSやMS-06の後継機となる量産機が次々と開発されていくが、ひとつの問題が表面化することとなる　公国軍のMS開発は複数の企業によって行われ、その企業内でも複数のチームが開発に当たっていた　それらの開発競争によってMSの開発スピードは非常に早いものとなったが、逆に異機種間の互換性に支障をきたしたのである　そこで公国軍はU.C.0079年2月、統合整備計画」を実施し　MSの規格化を図った　これによって開発期間は短縮され、以降のMS生産に大きな影響を与えていく　また　この計画に従って一部の機体は再設計が施され、一年戦争中期に少数が配備されている　これらの生産計画は「第2期生産計画」とも呼ばれる）さらに、幅広い戦術的対応を可能とした兵器システムの開発と　それを運用するための戦力の備蓄を目的とした　ペズン計画」によって開発されたMSに便宜的に付けられたナンバ　なども存在する　それらの公国製MSは、型式番号だけで見ても実に20番にも及び、実数はその倍はあると言われているのである

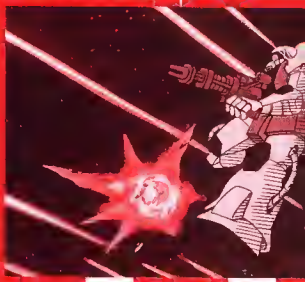
局地戦に特化されたバリエーション機

公国軍のMSに見られる特徴のひとつが、多様なバリエーションである。MS-06を例にとると、実に10種類以上ものバリエーション機が存在している。これは、MS-06の設計が非常に柔軟で、改修が容易であったということも理由に挙げられる。同時に、戦術や用兵に応じて性能を特化していく必要性が発生したためでもあった。このような経緯で開発・生産された改造機や改修機、カスタム機などは、すべてMSV（Mobile SUIT Variation）と呼称されている。ただし、この分類は実際に公国軍内部で用いられていたものではなく、のちの研究家や開発者などによって便宜的につくられたものである。これらのMSは、前述した統合整備計画によって新規MSの開発が一時的に停滞していた時期にもっとも多く開発され、配備されていったと考えられている。連邦軍のMS（特にRGM-79）にもこうしたバリエーション機は存在するが、その数は公国軍の比ではない。いかに公国軍がMS開発に力を注ぎ、柔軟な姿勢で状況に対応していったかということの裏れともいえるだろう。

ア・バオア・クーにおけるモビルスーツ運用

ジオン公国軍のMS編成

MSを開発した公国軍においても、それをどのように運用するかについては未知の分野であった。これまでとはまったく異なる兵器概念であるMSには、運用モデルとすべき前例がなかったのである。試行錯誤の末に公国軍が導き出した結論は、コロニー内でも使用可能な宇宙戦闘機というMSの位置付けであった。そのため、従来の宇宙戦闘機隊の編成に倣い、1小隊を3機で編成し、12小隊で1中隊36機編隊を構成するという編成単位を採用した。1小隊を3機で編成する場合には、小隊長が部下の2機を見失う危険性も指摘されたが、MSの優れた視認性と姿勢制御の容易さによってその問題点も克服できたのである。さらに公国軍は、U.C.0074年11月に設立した教導機動大隊によって、パイロットの育成とMS戦術、戦技の研究を行った。ちなみに、この部隊にはシャア・アズナブルや"黒い三連星"などの一年戦争で名を馳せるエースパイロットたちが名を連ねていた。この事実からも、教導機動大隊が公国軍の練度向上に役立ったことがうかがい知れるだろう。こうして、公国軍は連邦軍に先んじてMSを開発した優位性を利用し、戦術の確立を図ったのである。



ジオン公国軍のMS編成

ア・バオア・クー攻防戦に投入された公国軍のMSは、一説によると約3600機といわれている。その中心は、要塞の防空MS大隊に配備されていたMS-14であった。MS-14は700機以上が生産され、そのほとんどがア・バオア・クー攻防戦に投入された。その一方で、MSの絶対数が不足していたために、MS-05のような旧型機も投入されていた。この数のMSと艦隊戦力、そしてア・バオア・クー要塞の堅固な防空システムをもってすれば、連邦軍の撃退は十分に可能であると公国軍首脳部は考えていたのである。しかし、防衛戦力の中心であるMS-14のパイロットたちは、学徒動員を中心とした促成パイロットであった。MS戦力の消耗と同様に、公国軍はこれまでの連邦軍との戦いで熟練パイロットの多くを失っていたのである。そのため、練度の低い学徒兵を最終局面の厳しい戦闘に投入せざるを得なかった。表面上は連邦軍と対等の戦力に見えた公国軍ではあったが、実際にはそうした不安材料を内包していたといえよう。また、この攻防戦では80%の完成度だったMSN-02も急遽実戦に投入されている。公国軍の深刻なMS不足を示すエピソードのひとつである。

攻防戦序盤の展開とMS隊の動向

公国軍はア・バオア・クー要塞の堅固な防空体制に絶対の自信をもっていた。事実、連邦艦隊がア・バオア・クー要塞の十字砲火を突破することは容易ではなかった。ソロモン海戦で苦渋を舐めた連邦軍のビーム攪乱膜に対してはミサイル砲台の増設という素早い対応策を講じていたこともあり、ア・バオア・クー攻防戦の序盤において要塞からの対空砲火でNフィールドから進入する連邦艦隊を抑えることに成功した。この際、公国軍は投入するMS部隊を最小限に留めている。長期戦に備えてMS戦力を温存するという意図と同時に、前述したパイロットの練度不足がその理由にあったことが想像できる。一方のSフィールドは"ドロワ"を母艦とするMS部隊によって支えられていた。この部隊の中心となったのが、MSN-02と第34MS隊であった。特に、MSN-02はSフィールドから進入する連邦艦隊に大打撃を与え、着実な戦果を挙げている。なお、Nフィールドはギレン・ザビ総帥が、Sフィールドはキシリア・ザビ少将がそれぞれの陣頭指揮に当たっていた。ふたつのフィールドでMS運用に若干の違いが見られるのは、そのためだったと推察される。

キシリア・ザビ少将の度重なる誤算

公国軍の優勢に翳りが生じたのは、ギレン・ザビ総帥が暗殺された直後であった。指揮権が移行するわずかな空白の時間にNフィールドを支えていた"ドロス"が撃沈され、続いて"ドロワ"も沈められたことによって、戦況は一変する。これを打破するため、キシリア・ザビ少将はNフィールドにMS-14を中心とした防空MS部隊を派遣、Sフィールドには MSN-02を前面に押し出したMS部隊を向かわせた。しかし、ここに大きな誤算があった。少将にはMS-14隊の実情が正確に伝わっていなかったのである。機体の性能を十分に発揮できない学徒兵たちの動きは少将にとって予想外であり、結果として連邦軍の要塞への進攻を許すこととなる。そこでキシリア・ザビ少将は、敵を要塞内部に誘い込み殲滅を図った。練度の低いパイロットを以って戦果を挙げるためには当然の策といえたが、増援を望めない状況では自らの首を絞める行為に他ならなかった。まもなくしてア・バオア・クーが陥落したことも、必然といえるだろう。ちなみに、キシリア・ザビ少将が脱出を図った際、その護衛にMSを回すことすらできなかったという。投入されたMS約3600機のうち、帰還したのが600機にも満たなかったと言われる惨状を鑑みれば、それも当然といえよう。

基本兵装

公国軍が方向付けた、MSの基本兵装システム

ジオン公国軍の基本兵装は後の地球連邦軍のものと同様、接近戦を強く意識したものとなっている。最初期のMS用近接戦装備、ヒート・ホークはMS-05ザクⅠから、またザクⅡ用の肩部シールドもMS-06CザクⅡ(拠兵器運用型)から装備されていたようである。公国軍は一年戦争開戦以前から肉迫戦闘を重視しており、ひいては連邦軍のMS投入を考慮していたと推測できよう(ザクⅡのシールド及び左肩部スパイク・アーマーの装備は、キシリア・ザビの発案によるものといわれる。これはNTの研究と合わせて、キシリアの先見性を物語るエピソードとして知られている)。

重装甲MSのMS-09ドム・シリーズや、汎用性をある程度犠牲にした水陸両用MS以外の公国製MSの多くは、格闘兵器とシールドの両方を標準装備していた。連邦軍のRX-78ガンダムやRGM-79ジム・シリーズでも格闘兵器+シールドは標準化されており(連邦製兵器の方が技術的には進んでいたはいたが)、公国軍はMSそのものを開発していただけでなく、汎用MS基本武装の方向性を決定付けていたことも間違いない。

公国製MS用の格闘兵器

公国製汎用MSの武装面での最大の特徴となっているのが、ヒート系と呼ばれる赤熱タイプの格闘兵器である。ヒート系格闘兵器は、実体式格闘兵器と分類されることもあるように、マテリアル・タイプの刃を赤熱させることで攻撃力を発生する機構で、ビーム刃発生デバイスのみで構成されるビーム・サーベルとは全く異なるシステムである。

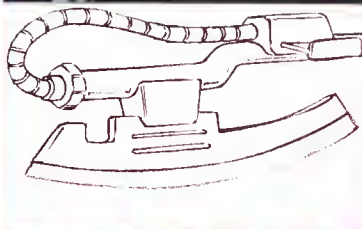
破壊力の面ではビーム・サーベルに及ばないものの、さほど高い技術力を要求しない兵器であったこと、比較的低出力であった公国製MSのジェネレーターでも使用可能で、機体にかける負担が小さいなどの利点もあり、初期のMS用兵装としては充分実用的なウェポンであった。公国軍もMS-14ゲルググで、遅れ馳せながらもビーム系格闘兵器ビーム・ナギナタを採用したが、事実上の主力MSはリック・ドムやザクⅡであったため、ヒート系格闘兵器は公国軍MSの標準装備として一年戦争を通して使用されることとなった。

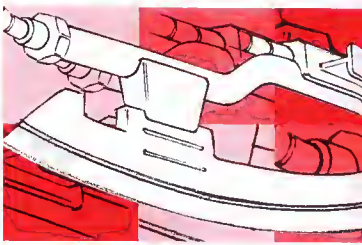
ビーム系格闘兵器が一般化した一年戦争以後の戦場でも、RMS-106ハイザックやMSN-04サザビーなどでヒート系格闘兵器は使用され、その有効性を示している。

Weapons for Principality of Zeon force mobile suit
ジオン公国軍モビルスーツ用兵装

01

ヒート系兵装

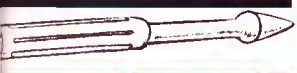


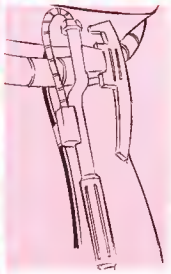


ビーム・ナギナタ

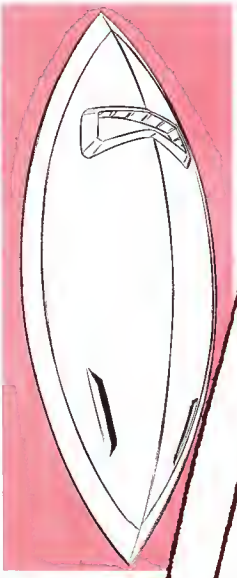
ヒート・ホークを経て実用されたヒート剣は、対MS用兵装として十分な威力を持っていたし、比較的大型であったためにデッドウェイト化しやすかった上、公国軍のMSがビーム・サーベルの標準装備したため、相対的に有利な兵器となっていた。

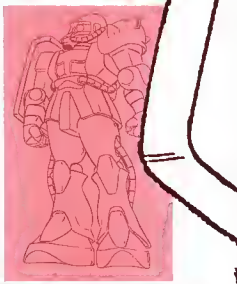
そこで、ビーム・ライフルの動可能となったゲルググがビーム・サーベルと同等の威であるビーム・ナギナタが採用された。ビーム・ナギナタは分の両端からビーム刃を発せるビーム系格闘兵器で、ン・ビームソードと呼称されともある。これは振り回す威力を発揮したタイプの兵器で、刺突を重視したYMキャンのビーム・サーベルと殊的な仕様となっていた。よりも斬撃の方が広い攻撃を持つため、双刃式のビームナギナタは有用な兵器であろうが、単刃式のビーム・ルよりも整備性が低かっか、ケルググ系以外のMSとんど採用されていない。





シールド





一年戦争では連邦製MSのものという印象が強いシールドであるが、公国汎用MSもシールドを装備している。最初にシールドを装備したのはザクⅡであると考えられているが、ザクⅡのシールドは若干小型であった上、右肩部の固定式装備で、後にスタンダードとなる腕部装備式のシールドとは異なる仕様であった。このため手持ち式のシールドと比べた場合、フォローできる範囲が狭くなってしまい、前弾性の向上は限定的なものとなっている。これは、シールドで片手がふさがってしまう事を嫌ったためとも考えられるが、ガンダムやケルググのように非使用時には背中に装備したり、腕部にシールド用ラッチを設置するといった発想がザクⅡの時点ではなかったためであろう(バインダー化するだけの技術は確立されていなかった)。ゲルググには連邦製MSのものと遜色ない手持ち式の大型シールドが装備され、ジムと互角以上の総合的な防御能力が与えられている。

BASIC

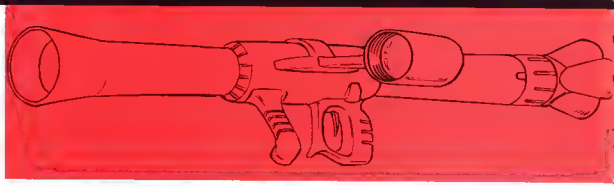
ジオン公国軍モビルスーツ用兵装

ザク・バズーカ

ザク・シリーズ用の武装の中でも特に強力な兵器がザク・バズーカで、その口径はザク・マシンガンの2倍以上にあたる280mmに達していた。

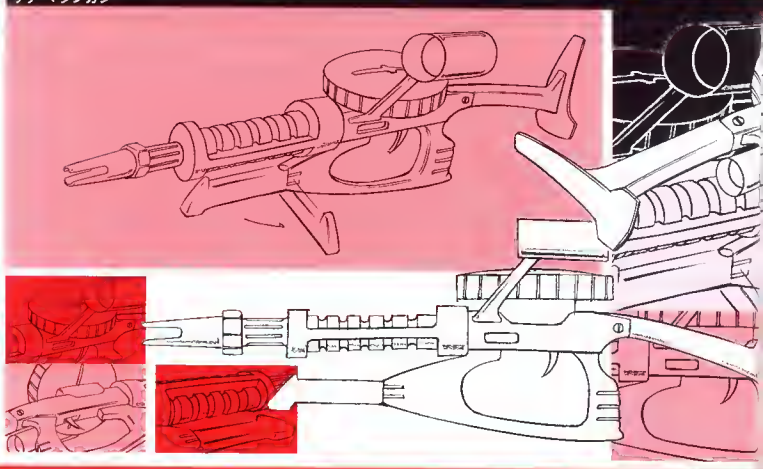
一年戦争開戦当初のザク・バズーカは核砲弾を装備し、コロニーの破壊やお亀攻撃に多用された(核兵器といえばミサイルや爆弾を想像するか、西暦期には カノン/榴弾砲用の核砲弾が存在しており、前例がないわけではない)。核砲弾を装填したザク・バズーカは、メガ粒子砲をはるかに上回る恐るべき破壊力を見せ付けたが、味方をも滅ぼしかねない極めて危険な兵器であったことや、核兵器の使用を禁じた南極条約の締結により、通常弾を使用する「安全な」ロケット・ランチャーとしてのみ運用されることになった。

核を兼ね手にされたとはいえ、ザク・バズーカはザクⅡ用としては最強といっていい兵装であり、"赤い彗星"シャア・アズナブル少佐(当時)も対ガンダム戦ではザク・バズーカを多用していた。



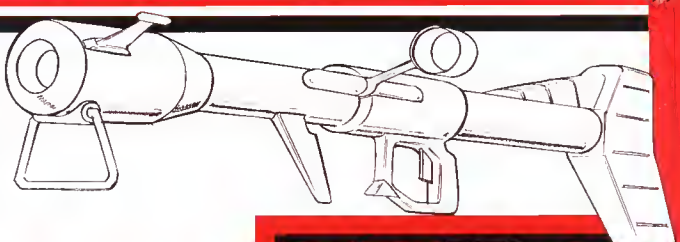
WARHEAD weapons

ザク・マシンガン



ム系列機に開発されたロケ
・ランチャーがジャイアント・
ズで、一年戦争時のMS用兵
としては最大級の360mmとい
径を持っていた。口径から
撃される弾薬のサイズは、ザ
バズーカのものの2倍以上で
径が約1.3倍であるため、弾
機構はおよそ2.1倍という計算
装り立つ)、その威力のほどを
ることができる。また、大型弾
により装弾数も増加しており、
その面でザク・バズーカを
回る性能を獲得しているとい
る。

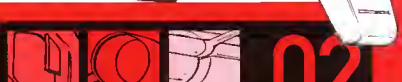
ジャイアント・バズの前身とし
を流れているのが、公国
の人間用ロケット・ランチャー
これがジャイアント・バズと
フォルムを持っているため、
イアント・バズは人間用のも
MS比仕様にサイズアップした
だと考えられている。
ジャイアント・バズはいくつか
リエーションを生み出してお
そのひとつがフォア・グリッ
装し、新型のセンサーを装
したMS-09R2リック・ドムⅡ用
バズーカである。



ザクⅡ用の武装として開発されたのが、120mm口径のザク・マシンガンである。これは、MS-05ザクⅠ用に開発されたザク・マシンガン(105mm口径)の発展型で、史上最大級の機関砲として完成した。ザク・マシンガンは連射性に優れる上、ザク・バズーカよりもコンパクトで取り回しが容易であったため、こちらを好むパイロットも多かったようである。

ザク・マシンガンは生産ラインや時期によって形状に違いがあることが判明しており、その中でもよく知られているのがMS-06F-2ザクⅡF2型用のMMP-78や、アジア地区で多く見られたZMP-50Dである。これらはストックの形状や、弾倉の装着位置に違いが見られるが、基本的には同じ兵器であり、堅実な性能的な差はなかったようである。

戦後に開発された連邦製MS、RMS-106ハイザックも、ザク・マシンガンのマイナーチェンジ版を装備しており、ザク・マシンガンは時代や勢力を超えて使用され続けることになる。



02

Weapons for Principality of Zeon force mobile suit
ジオン公国軍モビルスーツ用兵装

実弾系兵装

ジオン公国の前線を支えた主軸兵装

連邦軍の汎用MSの多くがビーム系兵装で身を固めていたのに対して、公国製汎用MSの主軸武装のほとんどは実弾系の射撃兵装であった。これは公国軍がMS-14ゲルググに至るまで、MS携行用メガ粒子砲=ビーム・ライフルを開発できなかったことが理由の一端であることは確実であるが、実弾系兵装がそれまでの公国製MSに適した武装であることも間違いない。ビーム兵器と異なり、ロケット・ランチャーやマシンガン等の実弾兵装はMS本体にかける負担が小さく(基本的には重量や発射時の反動問題さえクリアできれば装備可能である)、出力が比較的低かった初期のMSには有用な兵器であった。実際、実弾兵器をメイン・ウェポンとしたMS-06FザクⅡ やMS-09Rリック・ドムは、連邦軍の主力MS、RGM-79ジムを数多く撃破しており、必ずしも劣悪な武装ではないことを証明している。

2系統の実弾兵器

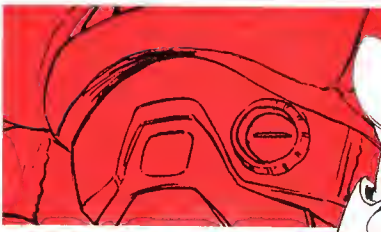
公国軍がMS用として採用した実弾兵装のほとんどは、連射性能に秀でたマシンガン・タイプの兵器と、単発での火力が高いロケット・ランチャー式のものに大別される。

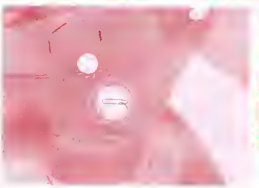
ザク・マシンガンに代表されるマシンガン・タイプの兵装は、単発での破壊力は(MS用携行兵装としては)高くないが、単位時間当たりの発射弾数は最高レベルであり、制圧兵器として優れた性能を発揮した。また、低威力といっても対装甲車輌/軍用機用としては充分な威力を持っているため、その連射性能とあいまって対機動目標用として有効な装備であった(広範囲を攻撃する制圧兵器という点では、MS-18Eケンプファー用のショットガンも、マシンガン・タイプに近い特性を持っていた)。

ジャイアント・バズやザク・バズーカに代表されるロケット・ランチャー式兵装の特徴は、大型弾薬による大火力である。MSだけでなく、艦艇すら一撃で撃沈し得る威力を持ったロケット・ランチャーはケルググ用ビーム・ライフルの登場まで、公国製MSの最大火力携行兵器として公国軍を支え続けた。ドム・シリーズのメイン・ウェポンに採用されたことからも、ロケット・ランチャー式兵装の性能のほどを理解できよう。また、発射筒に弾倉と銃把、照準装置を付けるだけで済む単純な構造と、それにともなう低コストもメリットであった。

ジオン公国軍モビルスーツ用兵装

拡散ビーム砲



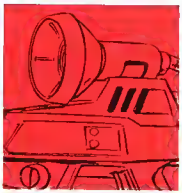


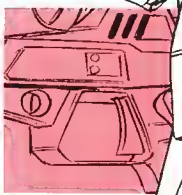
MS-09ドム・シリーズの胸部に固定装備されていたビーム系兵装が、拡散ビーム砲である。

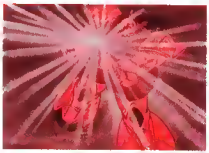
名前こそ拡散ビーム砲であるが、試作MA、MA-04Xザクレロに装備されていた広域攻撃用の拡散ビーム砲とは異なり、威力が極めて低く、射程も短かった。これはドム系列機に搭載されたジェネレーターの低出力が原因だったようである。

このように攻撃兵器としては力不足であったため、牽制や目くらまし(敵パイロットの視覚を一時的に奪うだけでなく、敵機のモニターを焼き付かせる効果も期待できた)として使用されることが多かった。この効果を期待されてか、宇宙用のMS-09Rリック・ドムや、統合整備計画に則って再設計されたMS-09R2リック・ドムⅡにも、拡散ビーム砲は受け継がれている。RGM-79ジム系列を始めとする、連邦製MSの多くが標準装備していたバルカン砲のような兵器であったといえるかもしれない。

ビーム・ライフル







ゲルググの主軸武装となったのがビーム・ライフルで、公国軍の汎用MS用の携行兵器としては、最強クラスの攻撃力を持っていた。連邦軍の主力MSジムのビーム・スプレーガンが簡易型のビーム兵器であったのに対し、ゲルグ用のライフルは長い銃身を持つフル・サイズのモデルで、その破壊力はガンダムのビーム・ライフルと同等であると考えられている。

このビーム・ライフルの特徴となっているのが、モノアイと直接リンクしない独立式の照準センサーである。一年戦争後に開発された照準センサーの多くが、ゲルググのもののような独立式であったことを考えると先進的な装備であったといえよう(それまでのMS携行用火器の照準装置は、メイン・カメラと直接リンクさせる=MSがスコープを覗き込むタイプであった)。

また、銃把の後方に伸びたストックは、連邦軍のビーム・ライフルにはほとんど見られなかった装備で、狙撃時等の命中精度の向上に一役買っていると思われる。

ビーム系兵装

ビーム・ライフル以前の公国軍機用ビーム兵器

公国製MSのビーム兵器といえば、終戦間際に登場したMS-14ゲルググのビーム・ライフルが有名であるが、それ以前から水陸両用MSやMAなどの局地戦用機には内蔵式のメガ粒子砲が装備されていた。

ビーム・ライフルの開発に出遅れた公国軍ではあったが、ムサイ級軽巡洋艦に代表される艦艇の主砲にはメガ粒子砲を採用しており、大型プラットホーム用のビーム兵器に関する技術の蓄積はあった。この技術はそのまま汎用MSには転用できなかったが、水陸両用MSやMAなどのジェネレーター出力と機体サイズに余裕のあったマシンには、メガ粒子砲を搭載可能であった(ビーム兵器の稼動には、高出力ジェネレーターがあることが望ましい)。これらの機体は投入できる戦場が限定されたため、総合的な戦局を左右するほどの存在にはなれなかったが、特定の戦域では絶大な効果を発揮した。

公国軍の局地戦用機で確立された制定式メガ粒子砲は、機動兵器用ビーム兵器のスタンダードとして、後の機体にも採用されていく。

03

Weapons for Principality of Zeon force mobile suit

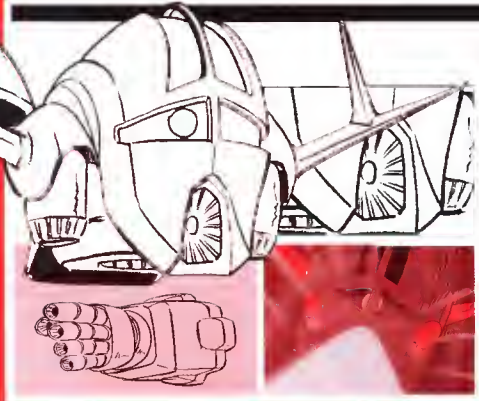
ジオン公国軍モビルスーツ用兵器

遅すぎた最強兵器。ビーム・ライフル

MS史におけるパイオニアの名を不動のものとしたジオン公国であるが、地球連邦軍に遅れを取っていた分野もあった。その代表的な例が、MS携行用メガ粒子砲ことビーム・ライフルである。

ビーム・ライフルは一撃必殺の戦力を持つ、一年戦争当時最強のMS携行用火器であり(それまでの最高火力兵器であったロケット・ランチャーよりもさらに高い火力と、小型ゆえの取り回しのよさを持っていた)、連邦軍がこれを装備したMSを開発したことは、公国軍にとって脅威以外の何物でもなかった。

RX-78ガンダムの時点で、比較的スムーズにビーム・ライフルの開発に成功した連邦軍に対し、公国軍はメガ粒子砲の小型化に難航していた。小型メガ粒子砲=ビーム・ライフルには、メガ粒子砲の弾倉とでもいうべきエネルギーCAPが必須であったが、公国軍の技術陣は実用化をなかなか進めることができなかった。公国軍がビーム・ライフルを実戦に投入できたのは、大戦末期に配備されたゲルググのことであった。しかし、その頃には戦争の帰趨は決しており、ゲルググのビーム・ライフルが連邦軍を脅かすことはほとんどなかった。



メガ粒子砲

MSやMAに内装されるビーム兵器は、普通に「メガ粒子砲」と呼称されることが多い。

一年戦争期のメガ粒子砲内蔵式MSとして有名なのが、MSN-02ジオングで合計13門のメガ粒子砲を装備していた、ア・バオア・クー戦においてジオングを駆ったシャア・アズナブル大佐は、10門のメガ粒子砲を同時に使用してサラミス級巡洋艦を一瞬で爆散させており、絶大な威力を物語るエピソードとなっている。また、アムロ・レイのガンダムを行動不能に追い込んだのも、ジオングの口吻部メガ粒子砲であった。

ジオングのメガ粒子砲の最大の特徴は、ニュータイプの脳波によって遠隔操作可能なサイコミュ兵器だったことである。5門のメガ粒子砲を備えたジオングの前腕部は、ジオング本体から離れて攻撃することを前提に設計されており、本体とはまったく異なる方向から敵機を攻撃する、オールレンジ攻撃を可能としていた。なお、ジオング本体と射出された前腕部は、ケーブルで結ばれていた。

01

Mobile armer of
Principality of Zeon force
ジオン公国軍モビルアーマー解説

高速戦闘に秀でたモビルアーマー

ジオン公国軍次期主力兵器の選考競争で提出されたプランを元に開発された、宇宙専用モビルアーマー（以下「MA」）。推進用の熱核ロケットエンジン2基とAMBACシステムの併用によって、宇宙空間での高い機動性を有している。事実、180度の姿勢転換を13秒で行うというMA-05の性能データは、この大きさの機動兵器としては驚異的といえるだろう。高速戦闘に限って言及するのであれば、そのポテンシャルは同時期に開発されたMSの数倍にも相当していたとされる。ただし、この高機動力のためにパイロットには強烈なGがかかり、コクピットの耐G性能をもってしてもなおパイロットに多大な負担を強いる。

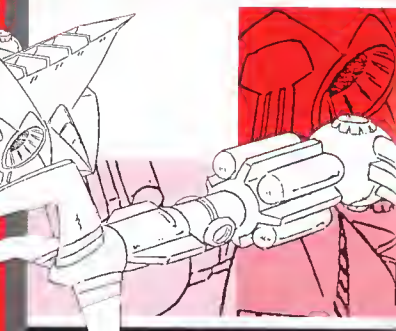
キャリフォルニアベースで開発が行われたMA-05のテスト機は、U.C.0079年12月初旬、実戦テストのためサンシャル級機動巡洋艦で宇宙へと上げられた。これにはテストパイロットとしてトクワン少尉が同行した。しかし、ほぼ同時期にソロモン攻略戦に参加すべく大気圏を離脱したホワイトベース級強襲揚陸艦（WB）の追撃戦に参加した際、RX-78との交戦で撃破されたといわれている。

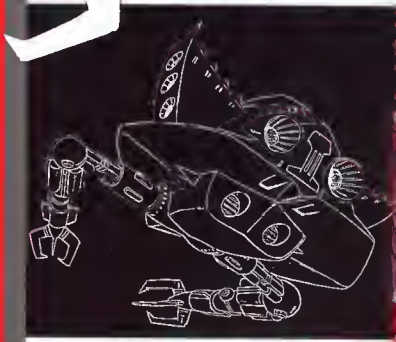
未成熟なMAという兵器分野の中でも、MA-05は最初期から開発が進められていた機種であり、一年戦争の末期には初期量産型が戦線に投入された。生産数は12機とも14機ともいわれるが、正確な数は今もって不明である。最後の戦場となったア・バオア・クー攻防戦においても参戦は確認されているが、その戦果については明らかになってはいない。ちなみに、公国軍のエース・パイロットのひとり、クレニス・エスコット中尉は大戦末期にこのMA-05を乗機としており、彼が残したMS撃墜スコア103機という数字から考えても、同機の戦果をうかがい知ることができるだろう。また、初期量産型ではMS-14に装備されているビーム・ライフルをマニピュレーターに持たせることとなっていたという俗説もあるが、ア・バオア・クー攻防戦に投入された機体からはそうした事実は確認されていない。

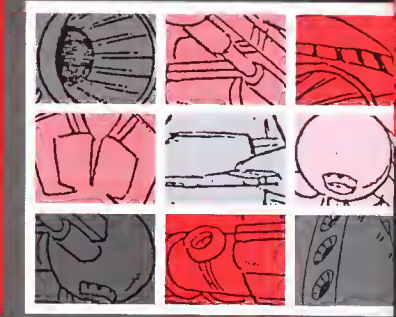
ビグロ

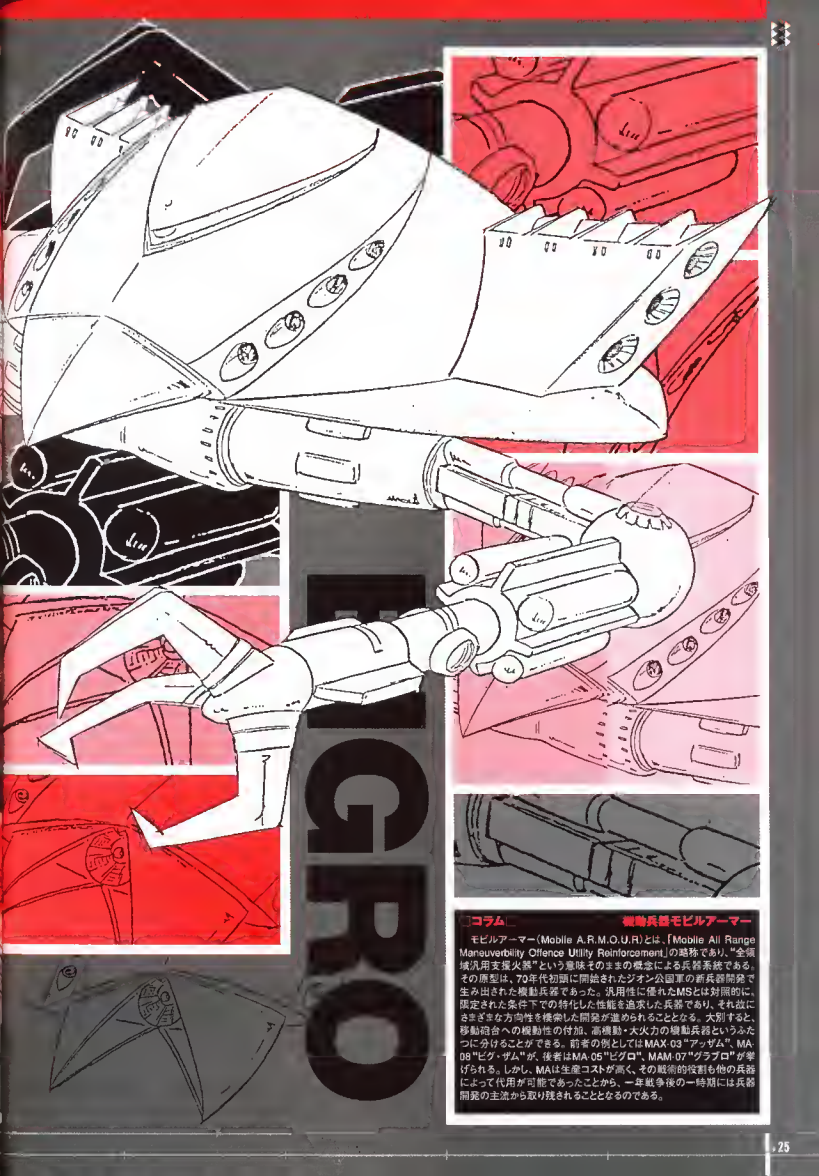
SPEC

■型式番号：MA-05 ■開発基地：キャリフォルニア・ベース
■頭頂高：45.5m ■本体重量：125.5t
■ジェネレーター出力：1万7800kW ■スラスター推力：13万6100kg
■武装：大型メガ粒子砲、クロー×2、ミサイル×8



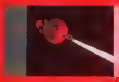






コラム　機動兵器モビルアーマー

モビルアーマー(Mobile A.R.M.O.U.R)とは、「Mobile All Range Maneuverability Offence Utility Reinforcement」の略称であり、"全領域汎用支援火器"という意味そのままの概念による兵器系統である。その原型は、79年代初頭に開始されたジオン公国軍の新兵器開発で生み出された機動兵器であった。汎用性に優れたMSとは対照的に、限定された条件下での特化した性能を追求した兵器であり、それ故にさまざまな方向性を模索した開発が進められることとなる。大別すると、移動砲台への機動性の付加、高機動・大火力の機動兵器というふたつに分けることができる。前者の例としてはMAX-03"アッザム"、MA-08"ビグ・ザム"が、後者はMA-05"ビグロ"、MAM-07"グラブロ"が挙げられる。しかし、MAは生産コストが高く、その戦術的役割も他の兵器によって代用が可能であったことから、一年戦争後の一時期には兵器開発の主流から取り残されることとなるのである。



ニュータイプ用兵器について

ニュータイプ思想

ニュータイプとは何かと定義することは、今日でも非常に難しい命題であるといえるだろう。その言葉の発祥は、ジオン・ズム・ダイクンの提唱したノオニズムと呼ばれる思想しかみることができる。宇宙という新しい生活環境を手に入れた人類が、潜在的に秘めていた適応力を働かせ、新たな環境に必要とされる高い洞察力と状況認識力を得る。これによって促される認識の共有と知性体の複合化が人の革新であり、そうした人類こそがニュータイプである。大まかに定義するとこのようになるのだが、あくまでこれは思想的なものであり、抽象的な概念であった。しかしこの思想は多くのスペースノイドたちに受け入れられ、自治権要求運動の理論的支柱となっていく。一方の連邦政府はこのニュータイプ思想を危険視した。正確にはニュータイプが出現する素地とスペースノイドの自治権獲得を結びつける風潮を嫌ったのである。そのため、連邦政府は関連出版物の発行などを規制し、自治権要求運動が活発化したU.C.0050年代後半からは、各サイトに対してもそうした思想への締め付けを厳しくしていった。

戦時におけるニュータイプとフラナガン機関

ジオン公国では、早くからニュータイプの能力についての研究が進められていた。それは現実におけるニュータイプの有り様についての思索からはじまり、あることをきっかけに現象面の研究へと進行する。それは一年戦争開戦当初のMSによる戦果の大きさであった。戦果が予想したものよりも遥かに高かったことに疑問を抱いたキシリア・ザビ少将は、MSの性能ではなくパイロットの資質に着眼して検証を行った。その結果、一部のパイロットは光速に近いメガ粒子砲すら回避していたのである。この能力の説明として、ニュータイプの現象面における能力が適用され、公国軍内部では軍事利用を目的としたニュータイプの研究が開始されることとなった。公国軍は十数年に渡って人間の潜在能力の研究を続けてきたフラナガン博士を招聘し、彼を主宰とした「フラナガン機関」を設立した。その研究によって、「サイコミュ」の基礎理論と実用端末が完成する。この装置によって、ニュータイプ能力の軍事利用が本格的なものとなっていく。同時にフラナガン機関は人材発掘にも活用され、ニュータイプの素養を持つ人物の調査を進めていくのである。

サイコミュ兵器

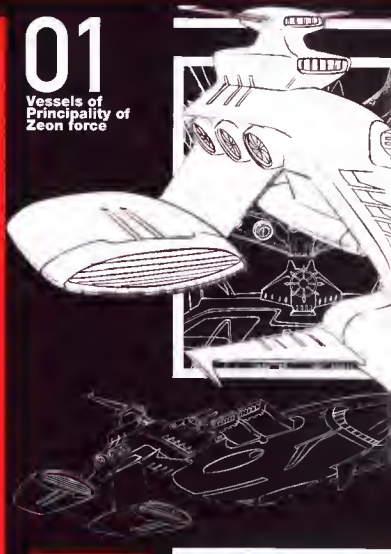
U.C.0079年10月にフラナガン機関が完成させたサイコミュは、サイコ・コミュニケーター（Psycho Communicator）の略で、脳波伝導システムとも呼ばれる。ニュータイプが発する「感応波」を受信して機械語に翻訳するインターフェイスであり、人間と機械の間の情報伝達量を飛躍的に向上させる装置であった。これを媒介とすることで、複数の砲台を同時に制御し、標的に対して全方位から攻撃する。それがオールレンジ攻撃と呼ばれる攻撃方法で、サイコミュを搭載したニュータイプ兵器の特徴的な戦法となった。公国軍はサイコミュを応用した兵器の開発を推し進めた。その結果生み出されたのが、MSN-02“ジオング”に搭載された有線誘導型メガ粒子砲と、MAN-08“エルメス”に搭載された無線攻撃機“ビット”である。しかし、サイコミュはシステムの小型化が難しく、大型のMSやMAにしか搭載できないという欠点が存在した。しかも、当然ながらニュータイプの素養がある人物にしか制御することができず、本格的な運用が難しかったのも確かである。前述のサイコミュ兵器を搭載した機体は、実戦投入にこぎつけた稀な例であった。

ニュータイプ部隊が残した戦果

MAN-08とMSN-02は、公国軍・特に　　タイプ研究を主導て行ってきたキノリア・サヒ少将　にと　て切り札ともいえる兵器であった　MAN-08はキノリア・サヒ少将直轄の独立第300戦隊に配備され、ソロモン陥落後から実戦に参加している　この部隊か何回戦闘を行　たかということについては　定かではない　交戦記録によると　連邦軍は同部隊と2回に渡て接触してい　ことは確かである　MAN-08はその戦闘で実に4隻もの艦を撃沈している　1日て戦艦を4隻撃沈したという驚異的な記録はMAN-08のヒットの圧倒的な威力と、パイロ　トであるララァ・スン少尉の類稀なニュ　タイプ能力の表れとみてよいだろう　しかしなから、MAN-08は2回目の戦闘でRX-78に撃墜され　その際にララァ・スン少尉も戦死している　一方のMSN-02は　ア・バオア・ク　攻防戦において実戦投入された　80％の完成度なから実戦には十分耐えうると判断された同機には、シャア・アズナフル大佐が搭乗　戦艦4隻とMS18機を撃破し　相討ちではあったかRX-78をも撃破した　最終的には撃破されたものの、サイコミュ兵器の威力を連邦軍に知らしめたのである

01
Vessels of Principality of Zeon force

ジオン公国軍の屋台骨を支えた主力艦

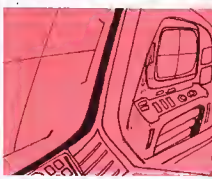


年戦争におけるジオン公国軍を代表する艦艇のひとつか、　のムサイ級軽巡洋艦である。この艦は連邦軍、公国軍を通して初めてMSの運用を前提に設計された艦艇であり 地球侵攻作戦も視野に入れた上で開発が進められていた。主武装はメガ粒子砲で、実体弾兵装を装備していないヒ　ム兵器の技術で連邦軍に遅れをとっていた公国軍かあえてムサイの主兵装としてビーム兵器を採用したのは　MSの搭載・運用を前提とした艦の性質からであった　装弾機構や弾薬庫を必要とする実体弾兵装は、MSの補給や整備に関する設備とのスペース効率の関係上大きな負担となるため、ヒ　ム兵装を主武器にせざるを得なかったのであるなお　一年戦争末期にはメガ粒子砲を2門に減らした簡略型タイプも建造されている。また、ブリッジの形も2タイプ以上確認されている。前述の地球侵攻作戦の実施を考慮に入れた設計は、左右2基の熱核ロケット・エンジンの間に大きなスペースを有していることからもうかがい知れる　ここにはHLVなどをセットして運搬することか可能であり 実際に地球降下作戦において人員と兵器を搭載したHLVを装着したムサイ級が大量投入され、多大な成果を上げた。同時に　ムサイ級には大気圏突入能力を有したコムサイか装備されている。コムサイは2機のMSを搭載できる。とから　突入能力を持たないムサイ級と大気圏内外を結ぶ連絡艇としてだけではなく、簡易輸送艇としても運用された　たし　ムサイ級の艦首に装備されており、発射方向か艦位置と重なってしまうことが多か　たため、脱出カプセルとしての使用は想定されていなかったと考えられている

ムサイ級はMS搭載艦としては最初期のものになるが、公国軍の戦略を視野に入れた設計の先見性とコスト面を含めた生産性の高さから、一年戦争を通して公国軍艦隊の中核を成して活躍していたのである

MUSAI class

ブリッジ前方（ファルメル）

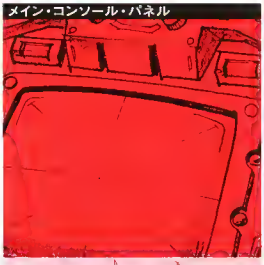


ブリッジ後方

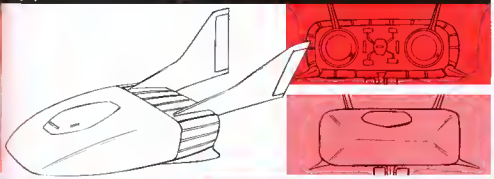
艦船

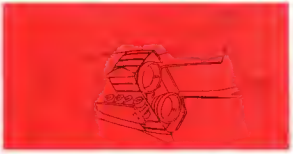
全長：234m ■ 全重量：1万3000t ■ 主推進機関：熱核ロケット・エンジン×2
推進機：2[後にメガ粒子砲×3(一年戦争後期にはメガ粒子砲が2門のタイプも
装　大型ミサイル・ランチャー×2、小型ミサイル・ランチャー×10
搭載機数：MS×6[ムサイに4、コムサイに2](異説MS×4～8、ムサイに6)

メイン・コンソール・パネル

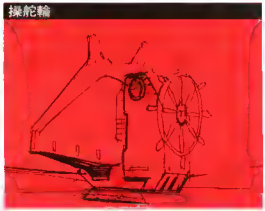


コムサイ

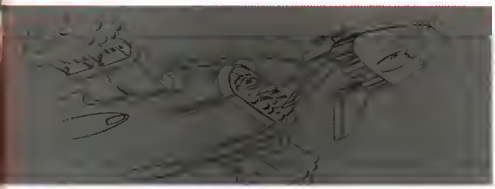


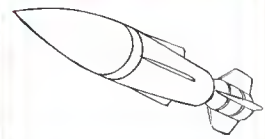


操舵輪



小型ミサイル

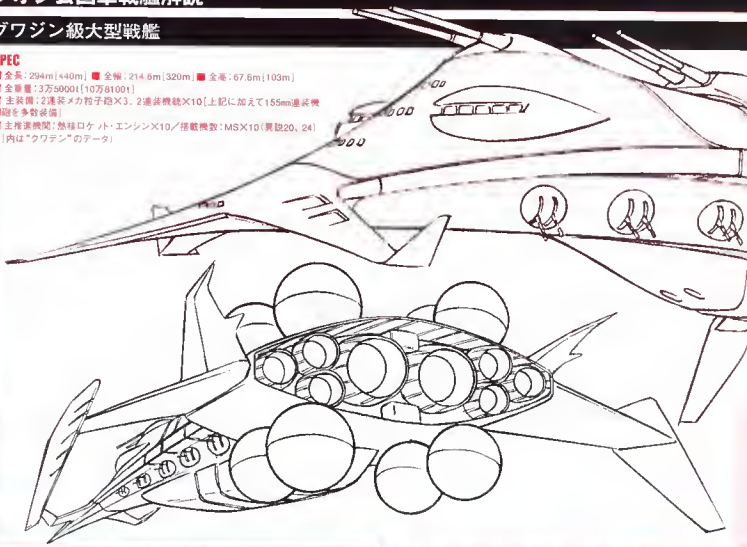




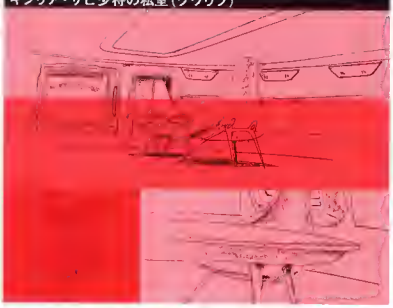
グワジン級大型戦艦

SPEC

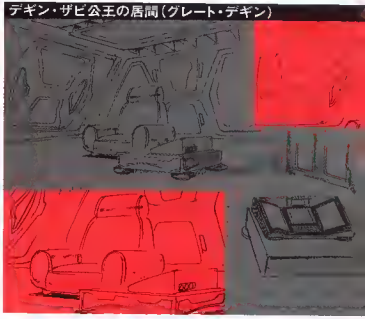
■ 全長：294m［440m］■ 全幅：214.6m［320m］■ 全高：67.6m［103m］
■ 全重量：3万5000t［10万8100t］
■ 主装備：2連装メカ粒子砲×3、2連装機銃×10［上記に加えて155mm連装機関砲を多数装備］
■ 主推進機関：熱核ロケットエンジン×10／搭載機数：MS×10［異説20、24］
［］内は"クワテン"のデータ

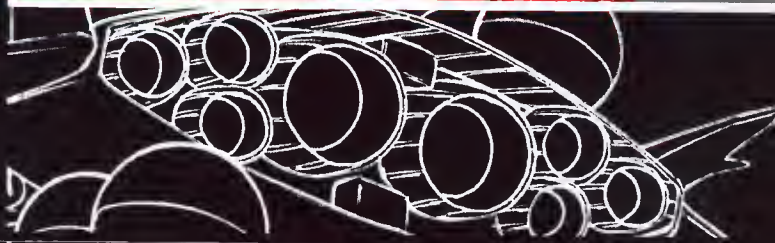


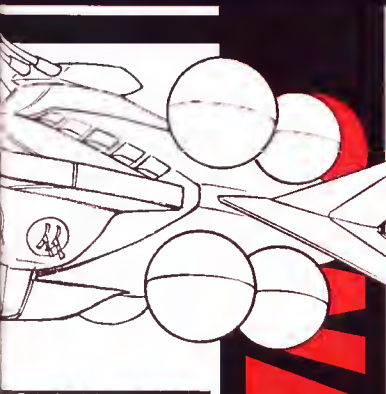
キシリア・ザビ少将の私室（クワリフ）



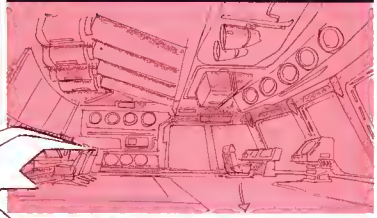
デギン・ザビ公王の居間（グレート・デギン）

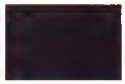




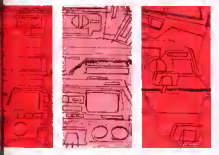


ブリッジ





ソーラ・レイ・コントロール・ルーム



MAZINE class

公国軍の象徴として君臨した大型戦艦

クワシン級大型戦艦は、一年戦争当時において最高峰の性能を有する宇宙戦艦である。連邦軍のマゼラン級も及ばぬ大火力と重装甲、航続距離を誇り、公国軍艦隊の中心的な存在として運用された。しかし、その詳細なデータは不明で　建造された艦数も定かではない　一般的には U.C.0076年3月に1番艦が就役してから、合計で10隻以上か建造されたといわれている。その規模や性能に比して建造に有する予算は莫大であったこともあり、この艦は戦力として以上に特別な存在として公国軍内部で扱われた　すなわち公国軍の象徴としての、まさしくフラッグシップである　多くの場合で艦隊旗艦として用いられ、サビ家の人間、あるいはその勅命を受けた将官が乗艦としたのである

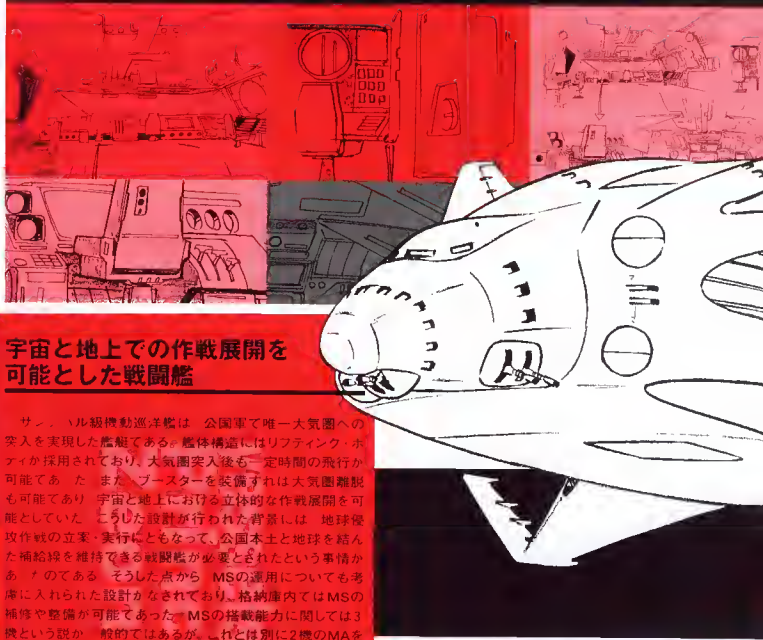
なかでももっとも名が知られているクワシン級は“クレート・テキン”であろう。デギン・ザビ公王の乗艦であった同艦はまさに公国の象徴といえるものだった。しかし、U.C.12月30日、和平交渉のために連邦軍レビル艦隊と接触した際、ソーラ・レイ・システムの直撃を受けて撃沈している　そのほかとしては通常のクワシン級よりもさらに大型の“グワテン”や、突撃機動軍に所属しア・バオア・クー攻防戦にも参加した“クワリア”、一年戦争終結後にミネバ・ザビを乗せて地球圏を離脱した“アサルム”などが知られている　たたそれぞれの艦名については異説も多く　真偽のほどは定かになっていない

また、クワシン級は公国軍の艦艇で唯一人工重力区画が設けられていた艦であった。無補給で地球圏を離脱できるほどの航続距離を誇る同艦から考えれば当然ともいえるが、この機構を有していた艦が連邦軍のホワイトベース級強襲揚陸艦とグワシン級だけであったことは　注目すべき点であるだろう

02

Vessels of Principality of Zeon force

ブリッジ



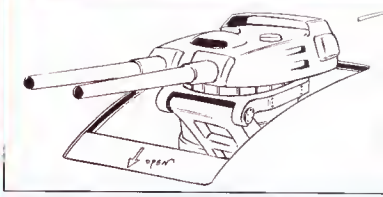
宇宙と地上での作戦展開を可能とした戦闘艦

サラミス級機動巡洋艦は、ジオン公国軍で唯一大気圏への突入を実現した艦艇である。艦体構造にはリフティング・ボディが採用されており、大気圏突入後も一定時間の飛行が可能であった。また、ブースターを装備すれば大気圏離脱も可能であり、宇宙と地上における立体的な作戦展開を可能としていた。こうした設計が行われた背景には、地球侵攻作戦の立案・実行にともなって、ジオン本土と地球を結んだ補給線を維持できる戦闘艦が必要とされたという事情があったのである。そうした点からMSの運用についても考慮に入れられた設計がなされており、格納庫内ではMSの補修や整備が可能であった。MSの搭載能力に関しては3機という説が一般的ではあるが、これとは別に2機のMAを運用していたという記録もある。そうしたことから6機から12機まで、異説はさまざまである。また、単艦で運用されることを前提としていたためか、火力についても重視されていた。なかでも主砲として装備された600mmの火薬砲は、完成度の低かった当時のメガ粒子砲に比べ、信頼性の高い武装であったといえる。航続距離もジオン軍艦艇のなかではクワンノン級に次いで長く、一説には単独で地球・火星間を往復可能であったともいわれている。しかし、サンシバル級に用いられた技術はあくまで既存のもの発展でしかなかった。同じ位置付けがされることの多いホワイトベース級強襲揚陸艦との最大の違いがそこにあったのである。

それでも、サンシバル級は一年戦争において大きな運用実績を残した。U.C.0076年の1番艦就航から一年戦争の終結まで、宇宙、地上を問わずさまざまな戦場で活躍することとなる。ア・バオア・クー攻防戦においても同艦の投入が確認されている。

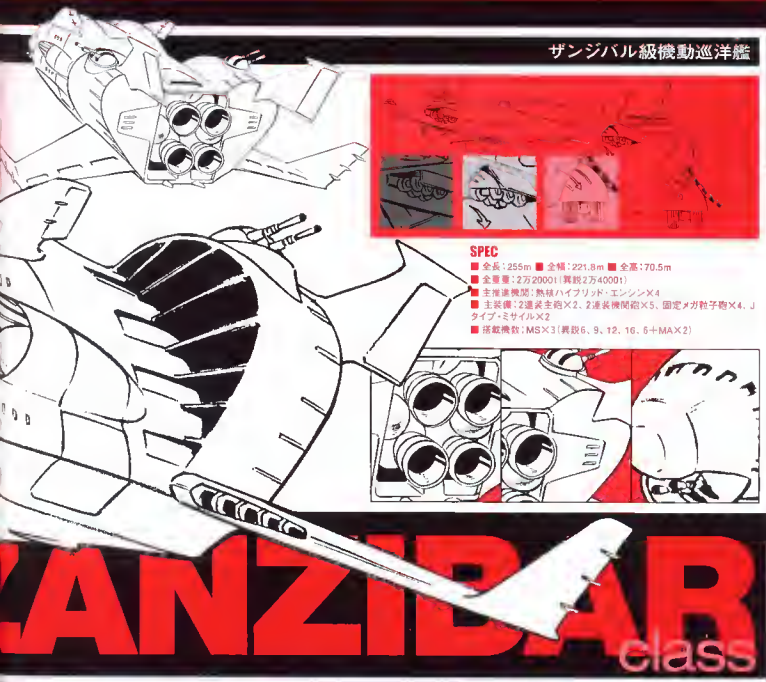
ロケットブースター

主砲



03
Vessels of Principality of Zeon force

ザンジバル級機動巡洋艦



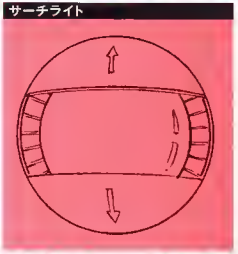
SPEC

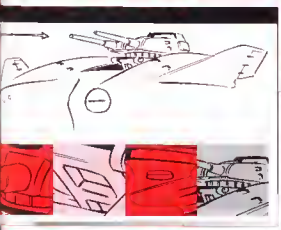
- 全長：255m ■ 全幅：221.8m ■ 全高：70.5m
- 全重量：2万2000t（異説2万4000t）
- 主推進機関：熱核ハイブリッド・エンジン×4
- 主装備：2連装主砲×2、2連装機関砲×5、固定メガ粒子砲×4、Jタイプ・ミサイル×2
- 搭載機数：MS×3（異説6、9、12、16、6＋MA×2）

ZANZIBAR class

メガ粒子砲

サーチライト





ドロス級大型輸送空母

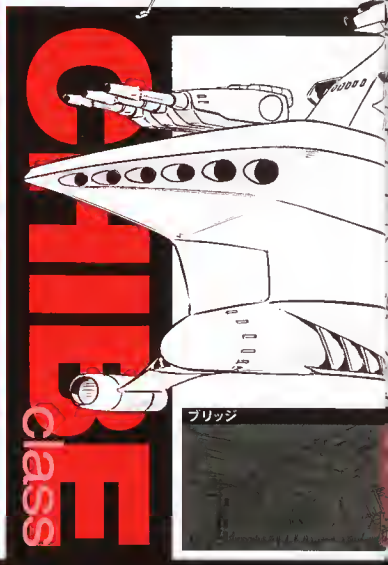
DO

SPEC
■ 全長：495m ■ 全幅：351.5m ■ 全高：123.7m ■ 全重量：14万4000t
■ 主推進機関：熱核ロケット・エンジン×5
■ 主兵装：2連装メガ粒子砲×8、2連装機銃×2
■ 搭載機数：MS×182（算定100、100以上）

一年戦争最大のMS運用母艦

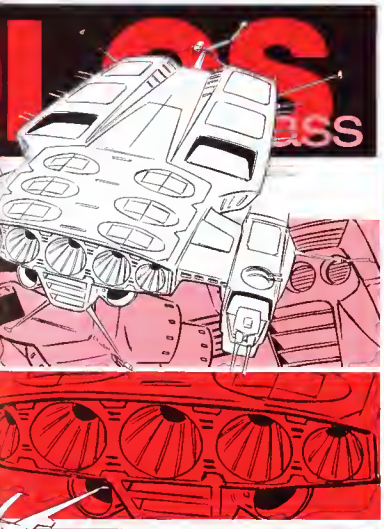
ドロス級大型輸送空母　超大型空母」の名称で呼ばれることもある）は、公国軍の艦艇では最後発であり、開発目体が機密とされていた　公国軍のMS戦略の最高到達点ともいえるこの艦は、一年戦争最大の運用艦であり、182機ものMSを搭載することが可能であった（異説あり）。さらにそのMSを運用するための設備も有しており、一説には巨大な集中冷却システムを装備していたともいわれている。さらに　連装メガ粒子砲8門を備え、5基の熱核ロケットエンジンで移動するこの艦は、移動要塞としての性格が強かったといえるだろう　U.C.0078年12月に開発が着手されたドロス級は3隻が建造されたといわれているが、実際に実戦投入が確認されているのは1番艦"ドロス"と2番艦"ドロワ"の2隻のみである　先に実戦に投入されたのは"ドロワ"で、艤装も済まないままにソロモンに配備され、ソロモン海戦に参加　ソロモン陥落にともなってほかの艦艇とともに戦線を離脱し、ア・バオア・クーへと移動した。一方の"ドロス"は就航後にクラナダへと送られたのち、クラナダとア・バオア・クーの間の防衛ラインに配備された。ア・バオア・クー攻防戦においては、"ドロス"はNフィールド、"ドロワ"はSフィールドの防衛に当たることとなった。2隻のドロス級は公国軍首脳部が想定した通りの働きを見せ、連邦軍の進攻を阻む大きな要因となった　しかし、戦局の変化にともなってNフィールドの"ドロス"が撃沈　続いてSフィールドの"ドロワ"も撃沈された　ドロス級の撃沈によって、堰を切ったように連邦軍はア・バオア・クーへの上陸を成功させ、公国軍の最後の砦は陥落することとなるのである

CAIBE class



ブリッジ

04
Vessels of Principality of Zeon force



チベ級高速重巡洋艦

SPEC

- 全長：336m ■ 全幅：113.2m ■ 全高：99.4m ■ 全重量：1万6000t
- 主推進機関：熱核ロケット・エンジン×5（実説、熱核ロケット・エンジン3×2）
- 主兵装：3連装メガ粒子砲×2、2連装機銃×18、ミサイル発射管×12
- 搭載機数：MS×8（実説9、12、18、数機）

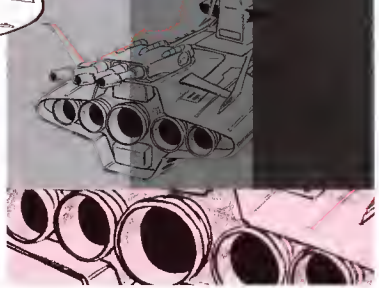
艦隊旗艦としても活躍した重巡洋艦

チベ級高速重巡洋艦は、公国軍艦艇としては初期に開発されたものであるが、その機動性と重装甲から一年戦争時にも運用された戦闘艦である　正式には「高速重巡洋艦」と分類されるが、ムサイ級軽巡洋艦との対比から「重巡洋艦」と表記されることも多い　1番艦の就役はU.C.0070年6月であり　当初は戦艦として想定されていた　また、当初は推進システムにプラズマ・ロケットと化学燃料ロケットを併用していたが、のちに熱核ロケット・エンジンに換装し主砲もメガ粒子砲へと変更を受ける　さらに、クワシン級大型戦艦の配備にともなって分類も高速重巡洋艦とされ、一年戦争時にはほとんどのチベ級がこの仕様となった　クワシン級が完成したとはいえその絶対数は少なく、さらにチベ級自体が戦艦を想定して開発されたこともあり、同艦は艦隊旗艦として運用された　特に特務艦隊と称されるような小規模の艦隊の旗艦として用いられることか多く、そうしたチベ級は艦体を赤く塗装され　識別の便宜か図られていた　公国軍艦艇の例にもれず、改修後にはMS運用能力を付加されており、8機のMSを搭載することか可能であ　た　たしこれには異説も多く、9機からは下は18機というありえない数を唱える説も存在している

チベ級でもっとも有名な艦は　コスコン機動艦隊の旗艦を努めた艦であるたろう（艦名は不明）　サイド6を出港した「WB隊」と交戦した同艦は　特務艦隊旗艦としてのチベ級の例をもっとも端的に表しているといえる　また　ア・ハオア・クー攻防戦にも少数のチベ級か参加しているか、その正確な数や戦果については明らかになっていない

Proof

05
Vessels of
Principality of Zeon force



ガトル

拠点防衛に運用された宇宙戦闘機

ガトルは「宇宙高速重戦闘爆撃機」と分類される宇宙戦闘爆撃機で、その設計や機構、装備などから推測するに、公国軍が大戦以前より配備していた兵器であると考えられている。武装としては、両舷に2基ずつ装着される単発式の大型ミサイル、左右5門ずつのミサイル・ランチャー、機体下方に内蔵された30㎜バルカン砲2門を有していた。機動性を増すため、機体の各所に姿勢制御バーニアを装備しているが、MSほどの汎用性を獲得するには至らなかったものの連邦の宇宙戦闘機とは互角に戦えた。

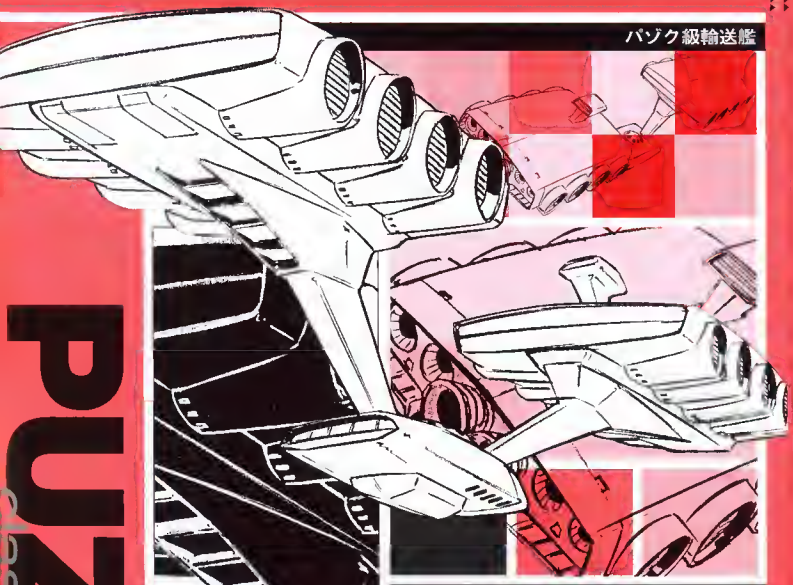
なお、機体前部に設けられた2つのコクピットは脱出カプセルとしても使用可能で、それぞれパイロット、コ・パイロット別々に乗り込む形になっている。さらに、コクピット後部には推進用ロケットを装備しており、航行が可能だったようだ。

公国軍は、早くからミノフスキー粒子散布下でのMS運用という戦術の転換に踏み切っていたものの戦況に応じてガトルのような宇宙戦闘機も用意しており、柔軟な戦術が可能になっていた。

ガトルは戦闘爆撃機のため、MSのように最前線へ配備されることは滅多になかったようだ。しかし、戦局が公国不利となって戦場がア・バオア・クーに及ぶにいたり、この機体が最前線で実戦参加することとなったのは、実に皮肉な話といえる。開戦当初よりMSが宇宙戦闘機を圧倒し得たのは予足を使ってのAMBACによる臨機応変な機動性に勝っていたためで、立場が逆となったガトルがア・バオア・クー攻防戦においてめざましい戦果を上げるのは無理な話だったのだろう。

01
Battle ship and Transporter

GATTLE



PUZOCK
CLASS TRANSPORTER

独特の形状が特徴の大型輸送艦

艦体の前後にコンテナを繋いだ特異な形状が特徴の、公国軍の輸送艦。前部コンテナには将兵や食糧、後部コンテナには兵器や整備用の機器を搭載することが可能だった。また、2基のコンテナを繋ぐブロックも実は予備コンテナであり、ブリッジは後部ブロック上部に設置されている。同じ輸送艦であるパプア級補給艦が当初はミサイル戦艦として設計されていたのを改装したのに対して、このパゾク級は当初から輸送艦として設計されていた。そのため、大規模な武装は施されておらず、艦の構造自体も非常に単純である。就役時期は不明だが、一年戦争後期には推進システムを中心に小規模の改修が行われている。そういった点からすると、一年戦争以前に開発・建造された艦であるという見方もできるだろう。また、この艦はMSを多数搭載することが可能であったが、それはあくまで輸送という観点からであり、戦闘母艦としてMSを運用する設備は有していなかった。それでも輸送艦としての性能は水準を満たしていたらしく、ア・バオア・クー攻防戦においても少数のパゾク級が運用されていたことが確認されている。

02
Battle ship and Transporter

ガンキャノンのコンセプトとその行方

一週間戦争およびルウム戦役で、ジオン公国軍の新兵器MSに大敗を喫した地球連邦軍は、独自のMSの開発と運用母艦の建造を骨子とする「V作戦」をスタートした。V作戦には、開戦以前から進められていたMS開発プロジェクト「RX計画」が統合されており、RX-78ガンダムを始めとするRXナンバーのMSを誕生させることになる。

RX計画は、連邦軍がMSの本質を理解していなかった頃からのMS開発計画であったため、実験的要素が強く、MS技術や方向性に対する模索が行なわれていた。当初連邦軍は「MSとは何か？」という命題を見誤っており、RX-75ガンタンクという"戦車モドキ"を作り上げてしまう。重遠技術が未完成であったため、履帯式の下半身を採用した点はともかく、近距離戦闘を重視すべきMSに長距離砲を固定装備し、開発をガン・ランチャー化して汎用性を無視してしまったのは、不見識といわざるを得ない。

ガンタンクの後を受けて開発されたのが、RX-77ガンキャノンである。ガンキャノンは二足歩行システムと「手」を持った、合理的なMSであった。しかしその両翼には、ガンタンクから受け継いだキャノン砲が固定装備されており、相変わらず砲撃戦を前提としていたMSとなっていた。このように、連邦軍が信奉してきた大艦巨砲主義と、新世代兵器であるMSの狭間に誕生した、隔人間的な機体となっていたガンキャノンであるが、その設計思想には含む種の「正解」が含まれていたことも間違いない。

ガンキャノンは中距離支援型に分類される機体だが「支援型MSであっても、装備と"戦重"してしまうのが宇宙世紀の戦場であるため、この区分は意味がなくなることも多い。MSであるとには間違いなく、一種の局地戦用MSだと換言することもできる。つまり、機動能力に劣りながらも、手持ち付きのマニュピレーターによる汎用性も捨て切っていない、柔軟な運用性能を持った機体であるといえるのだ。

また、固定武装であるキャノン砲と、手持ちの火器を同時に運用する重火力MSとしての可能性も秘めていた。実際、ガンキャノンが単位時間あたりに投入できる火力は、ガンダムのそれを上回っており（理屈の上では、ガンキャノンは4本の腕を持っているのと同じなのだから）、一年戦争時の連邦製MSの中で、最大の火力を持った機体はガンキャノン・シリーズだったという視点も成立し得る。また、比較的重量を胸重ではなく、頑強な肩体に武装を取りつけているため、大口径火砲を装備しやすいのもメリットである。

これらの利点は、ホワイトベースが実戦に投入されて（巻き込まれて）から、実証されることになり、連邦、ジオンの双方でキャノン・タイプのMSが開発されていった。一年戦争時に開発されたキャノン系の機体として知られるのが、連邦軍のRGC-80ジム・キャノンやRX-77D量産型ガンキャノンで、ジオン側ではMS-06Kザク・キャノンがそれにあたるだろう。

新たなMSのカテゴリーを作ったキャノン系MSだったが、一方で欠点も露呈しはじめる。それは格闘戦に対する対抗手段の脆弱さで、ガンキャノンはルナ・チタニウム製の重装甲で耐えるか、そもそも敵に近付かない（近付けさせない）といった戦術をとらざるを得なかった。兵器には必然的得手不得手があるため、それだけを持ってガンキャノンを非難することはできないが、格闘戦が発生しやすいMSにとって重大な問題であることは確かだった。

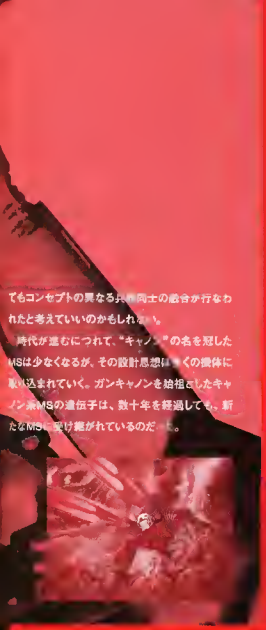
このような問題に対する解決策は、運用方法の改善や、機体の改修、もしくは新規の開発用である。ホワイトベース隊のガンキャノンは基本的にガンダムと共に戦ったため、ガンダムに前衛を任せるといった運用面での対応が有効だったが、後発のキャノン系のMSは、機体そのものに根本的な改修がされたものもあった。その代表が、RGC-83ジム・キャノンⅡである。ジム・キャノンⅡは、2門のビーム・キャノンとジム・ライフルによる大火力だけでなく、重装甲による耐弾性も併せ持つ機体だが、ホーム・サーベルとシールドも標準装備しており、キャノン系としては万能なMSとなっている。

だが、この万能性がキャノン系MSの影を薄くしていく。というのもキャノン系MSが万能になるということは、汎用型MSをより万能な機体なることを意味しているからだ。結果、グリプス戦役以後に登場した可変MS＝第3世代MSや、重火力MS＝第4世代MSの前に、キャノン系MSは姿を消していく——というより、開連投術の向上により、キャノン系MSのコンセプトが盛り込まれたMSが誕生し始めたため、汎用型、キャノン型といった区切りが曖昧になっていったのだ。かつての西暦の最後期に、技術の高度化や戦術・経済的な要求から、攻撃機と攻撃機が融合した多目的戦闘機が戦闘機や攻撃機を誕生させたように、宇宙世紀におい

Mobile Suit Column 03

RX-77 GUNCANNON

モビルスーツコラム　RX-77ガンキャノン



てもコンセプトの異なる兵器同士の融合が行なわれたと考えていいのかもしれない。

時代が進むにつれて、"キャノン"の名を冠したMSは少なくなるが、その設計思想は多くの機体に取り込まれていく。ガンキャノンを始祖としたキャノン系MSの遺伝子は、数十年を経過しても、新たなMSに受け継がれているのだ。

COLUMN 03

RX-77ガンキャノン
（ビームライフル装備、平手パーツ、コアファイター付属）

試作機の本命
ケーススタディー・77

一年戦争が始まり、MS開発の必要性を痛感させられた連邦軍は「V作戦」を急ぐ事になる。

しかし、すべてMS開発に消極的であった連邦上層部はMSという兵器の開発からはじめなければならない状況であった。それゆえ開発された連邦軍試作機の多くはとてもMSと呼べるような代物ではなかったようだ。

そんな中、試作機RX-77ガンキャノンというケーススタディーは成功作であったと考えられる。実装弾キャノンが両肩に装備されている為、本武装が一番で当時最強クラスのビームライフルを標準装備していた。運動性悪化の原因といわれる重装甲も実弾兵器が中心の当時のジオン軍に対して有効に機能していたといえる。また少数ながら量産もされており最終戦ア・バオア・クーにおいても多くの戦果をあげていたようだ。一撃離脱支援型MSというジャンルは戦中戦後のキャノンタイプMSに引き継がれていくことになる。

Figure "RX-77 GUNCANNON" Manual

付属フィギュア解説　RX-77ガンキャノン

図1
マーキングシール貼り位置参考

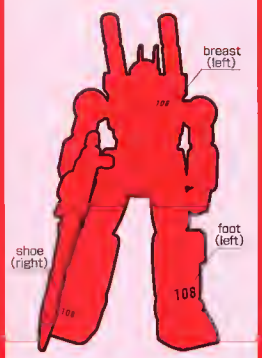


図2

※壁の上下の向きは突起が二つある側が上向き、三つある側は下向きとなります。
※すべてのジオラマベースを結合する場合は、上図にあるように、ジムの壁と地面を分け、地面をガンキャノンの地面部分に、壁はジムに同梱されているアタッチメントを下に取り付けた上でガンキャノンの壁に接合します。

マーキングシール付属
自分の好きなガンキャノンに！

今回のフィギュアはRX-77ガンキャノンである。両肩・両股・両足首の6カ所にABSボールジョイントを採用し、全身12箇所可動によるポージングが可能となっている。付属の透明成形の支柱を使用すると空間に浮いている状態も再現できる。

今回は機体バリエーションに対処すべくマーキングシールを付属。内容は左胸用・右足首用・左足用から成り、ナンバーを3タイプから選択可能だ（図1参照）。また好みに応じて「TV版のナンバーなし」「108&109チーム」「203」など自分の思うままのガンキャノンに仕立てるのも良かろう。

この他、フィギュアと同スケール1/220サイズのコアファイター（ダメージ版・無彩色）も付属。ラストシーンでア・バオア・クーから主人公アムロが脱出するシーンのブロークンバージョンだ。あえて未彩色としているのは読者各々がイメージする空間にフィットするようにして欲しいからである。活かし方はあなた次第といえようか。

ジオラマベース同士も接続可能。全シリーズを集めると、あの「ラストシューティング」が再現できる（図2参照）。ザクⅡやガンダムと是非一緒に飾って欲しい。

●フィギュア・ベース写真は試作品を使用している場合がございます。仕様は製品向上の為、変更になることがございます。あらかじめご了承ください。

OK COLLECTION

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポートvol.3 ジオン公国軍兵器編

CONTENT

国民性を具現化したジオン公国軍兵器 2

ジオン公国軍モビルスーツ解説 4
ジオン公国モビルスーツ用語解説 10

ジオン公国軍兵器概要 12

ジオン公国軍モビルスーツ概要 14

ア・バオア・クーにおけるモビルスーツ運用 16

ジオン公国軍モビルスーツ用兵装 18

ジオン公国軍モビルアーマー解説 24
ニュータイプ用兵器について

ジオン公国軍戦艦解説 28

戦闘艇、輸送艦 36

モビルスーツコラム RX-77 ガンキャノン 38

付属フィギュア解説 40

次号予告 43

2004年2月25日発行 トイブックコレクションシリーズ ガンダムオペレーション ア・バオア・クーvol.0003
価格 1200円(本体1143円) 発行人 小松崎孝一 編集人 猪俣謙次 企画・編集 株式会社セイカ トイブック事業部
発行・発売 株式会社セイカ 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-8 栄泉岩本町ビル 電話:03-5820-3745(編集)
トイブックホームページアドレス http://www.toybook.jp 印刷所:図書印刷株式会社
トイ 製作管理 内山博之 ブック 秋葉 坂口悟仁、杉山和紫 エディトリアルデザイン 有限会社ロケットパンチ MSイラスト 中村源一
アドバイザー 岡崎昭行 撮影 スタジオアール、中村浩 撮影協力 月刊ホビージャパン パッケージデザイン 神田美智子(ブレインナビ)
編集協力 杉原亮由、大矢直人(ブレインナビ) 監修 株式会社サンライズ

●本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部、あるいは全部について株式会社セイカ トイブック事業部の承諾を無しに、いかなる方法によっても無断で複写、複製することは禁じられています。●乱丁本、落丁本、箱包時における欠品及び破損は、小社品質管理室(03-5820-3743)までお送り下さい。送料弊社負担にてお取替えいたします。©創通エージェンシー・サンライズ

ISBN 4-902399-02-4 Printed in Japan. Made in China

NEXT ISSUE 次号予告

Vol.0004

GUNDAM OPERATION
A・BAOA・QU

TOY

コレクションフィギュア4
RGM-79　ジム
ビーム・スプレーガン装備、
シールド、
ハイパー・バズーカ付属
専用ジオラマベース

BOOK
ア・バオア・クー レポートvol.0004　―モビルスーツ戦編
モビルスーツの戦闘方法、モビルスーツ別戦闘名場面etc

2004年3月25日発売予定

GUNDAM
OPERATION
ア・バオア・クー レポート
VOLUME
003
ジオン公国軍兵器編